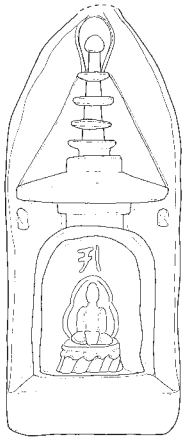
野添大辻遺跡（第３次）発掘調査報告

～度会郡大紀町野添～



出土泥塔

２０１６（平成28）年３月

三重県埋蔵文化財センター

１・２区全景（南西から）

C16 Pit５泥塔出土状況（南から）

C16 Pit 5 出土泥塔

例　言

1　本書は三重県度会郡大紀町に所在する野添大辻遺跡の第３次発掘調査にかかる報告書である。

2　本遺跡の調査は主要地方道伊勢大宮線（野添）地方道路整備（改築）事業に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部から経費の執行委任を受けて実施した。

3　発掘調査期間は平成26年５月９日～平成26年８月11日である。工事立会は平成27年１月16日に実施した。この他、道路工事の進捗に合わせて随時立会調査を実施している。

4　第３次発掘調査面積は本調査784㎡、立会調査62㎡の計846㎡である。

5　発掘調査体制は次の通りである。

調査主体　三重県教育委員会

［現地調査　平成26年度］

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課　主幹　小倉　礼

技師　小原雄也

発掘調査作業委託　　株式会社丸文工業

自然科学分析業務委託　株式会社パレオ・ラボ

［整理作業　平成27年度］

整理担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課　技師　小原雄也

6　本書の執筆、遺物写真の撮影は小原があたった。

7　発掘調査および整理作業に際しては、地元野添地区の方々をはじめ、下記の諸氏や機関に御指導・御協力を賜った。記して感謝したい（敬称略）。

狭川真一、畑　大介、大紀町教育委員会、三重県県土整備部

8　調査図面、写真、出土遺物は三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

1　本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「国東山」「横野」「脇出」「伊勢佐原」（平成12年10月発行）、三重県共有デジタル地図の1:2500地形図（06PF811番）を用いた。
三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（承認番号：三総合地第93号）。

2　標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

3　本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第Ⅵ座標系の座標北で示した。

4　本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。
ＳＡ：柱列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＥ：井戸　ＳＫ：土坑　ＳＺ：性格不明遺構
Ｐｉｔ：柱穴・小穴

5　土色の標記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に拠った。遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。

6　遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。
土器・陶磁器（1:4）、泥塔（1:1）、石器（1:2）

7　遺物観察表の凡例は以下の通りである。
・色調は外面のみ、標準土色帳の色名を記す。
・胎土の緻密さは、粗・やや粗・やや密・密の４段階である。
・土器の残存率は、全周12分割して示す。（例：口縁部３/12）。１/12以下のものは、「口縁部片」などと示す。また、土師器皿の底径は記していない。
・実測番号は、遺物実測図番号である。

8　註は各章の文末に付し、参考文献も註に記した。

9　遺構一覧表、遺物観察表は各章末に付した。

10　写真図版中の遺物に付した番号は各遺物の報告書番号と対応する。また、遺物写真は縮尺不同である。

目　次

例言・凡例

目　次

Ⅰ　前　言 …… 1

1　調査の経緯と経過
2　調査の方法

Ⅱ　位置と環境 …… 4

1　地理的環境
2　歴史的環境

Ⅲ　遺　構 …… 7

1　基本層序と微地形
2　遺構

Ⅳ　遺　物 …… 21

Ⅴ　自然科学分析 …… 28

1　分析の内容と結果
2　テフラ分析
3　珪藻分析
4　プラント・オパール分析

Ⅵ　総　括 …… 38

1　中世「野副郷」の様相
2　泥塔の位置づけ
3　結語

挿図目次

第１図　発掘調査位置図 …… 3
第２図　遺跡分布図 …… 5
第３図　遺跡周辺地形図 …… 5
第４図　調査区位置図 …… 6
第５図　グリッド割付図 …… 6
第６図　１区遺構平面図 …… 8
第７図　２区遺構平面図 …… 9
第８図　調査区土層断面図 …… 11
第９図　調査区土層柱状図 …… 12
第10図　３区遺構平面図 …… 13
第11図　１区掘立柱建物・柱列遺構図 …… 13
第12図　２・３区掘立柱建物遺構図 …… 14
第13図　Ｃ16 Pit５泥塔出土状況図 …… 15
第14図　ＳＥ3004遺構図 …… 16
第15図　ＳＥ3009遺構図 …… 17
第16図　ＳＫ3001・3007・3008・3011・3012・3021遺構図 …… 18
第17図　ＳＫ3020遺構図 …… 19
第18図　ＳＺ3010遺構図 …… 19
第19図　遺物実測図１ …… 22
第20図　泥塔各部名称図 …… 22
第21図　遺物実測図２ …… 24
第22図　遺物実測図３ …… 25
第23図　試料中の含砂率、粒度組成、鉱物組成、火山ガラスの形態 …… 30
第24図　火山ガラスの屈折率測定結果 …… 30
第25図　堆積物中の４φ篩残渣中の軽鉱物および火山ガラスと重鉱物 …… 31
第26図　堆積物中の珪藻化石 …… 34
第27図　野添大辻遺跡第３次調査における植物珪酸体分布図 …… 36
第28図　野添大辻遺跡第３次調査から産出した植物珪酸体 …… 37
第29図　主要遺構分布図 …… 38
第30図　偏平舟形光背宝塔型泥塔分類図 …… 40
写真１　現地説明会風景 …… 2

表目次

第１表　基本層序対照表 …… 11
第２表　遺構一覧表 …… 20
第３表　遺物観察表 …… 26
第４表　分析試料とその特徴 …… 28
第５表　テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果 …… 29
第６表　４φ篩残渣中の鉱物組成 …… 29
第７表　堆積物中の珪藻化石産出表 …… 34
第８表　試料１g当りのプラント・オパール個数 …… 36
第９表　偏平舟形光背宝塔型泥塔一覧 …… 39

写真図版一覧

巻頭図版１
　１・２区全景
　Ｃ16 Pit５泥塔出土状況
巻頭図版２
　Ｃ16 Pit５出土泥塔
写真図版１
　宮川北岸からの遺跡遠望
　作業風景
写真図版２
　１・２区調査前状況
　２・３区調査前状況
写真図版３
　１区全景
　２区全景
写真図版４
　３区全景
　１区掘立柱建物・柱列完掘状況
写真図版５
　１区掘立柱建物・柱列完掘状況
　２区掘立柱建物完掘状況
写真図版６
　ＳＺ3010検出状況
　ＳＥ3004検出状況
写真図版７
　ＳＥ3004半裁状況
　ＳＥ3004石組半裁状況
写真図版８
　Ｑ３ Pit１出土状況
　ＳＥ3009掘削状況
　ＳＥ3015掘削状況
　ＳＫ3018完掘状況
　ＳＫ3020上部石材出土状況
　ＳＫ3020下部石材出土状況
　ＳＫ3020底部石材出土状況
　ＳＺ3010完掘状況
写真図版９
　遺物４・10・13・17・18・20・21・24
写真図版10
　遺物25・27・28・29・33・37・43・44・48・54
写真図版11
　遺物59・60・61・64～70・78

Ⅰ　前　言

1　調査の経緯と経過

（1）調査に至る経緯

県道伊勢大宮線は、伊勢市から旧大宮町を結ぶ約40㎞の主要道である。この道路は主に宮川沿いの山間部を通り、一部に狭隘な区間が残存するため、各地区でバイパス建設や拡幅工事がなされている。

野添大辻遺跡は、今回の道路改良工事を契機に新たに発見された遺跡である。範囲確認調査で判明した約2,780㎡の調査面積について、調査原因者の三重県伊勢建設事務所との協議により本発掘調査が必要とされた。業務量の都合から、平成24年度から平成26年度の３か年にわたり発掘調査が行われた（第１図）。事前協議の経過は、刊行済みの『野添大辻遺跡（第１次）発掘報告』[(1)]、『野添大辻遺跡（第２次）発掘報告』[(2)]、（以下、『第１次報告』、『第２次報告』という）を参照されたい。

（2）第３次調査の実施

第１次調査で907㎡、第２次調査では1,023㎡、第３次調査では本調査784㎡、工事立会62㎡の計846㎡の調査を実施した。第３次調査をもって本発掘調査は完了した。この他に道路工事の進捗に合わせて、随時立会調査を行っている。

（3）調査の経過

第３次調査は平成26年５月９日に開始し、平成26年８月11日に終了した。また、本調査終了後に第２次調査１・２区の隣接地で立会調査を実施した。

調査の経過に関しては以下の通りである。

［調査日誌（抄）］

2014年（平成26年）

４月10日　現地協議（伊勢建設事務所）。
５月９日　現地協議（丸文工業）。
５月22日　現況の段階確認完了。
５月23日　１区重機掘削開始。
５月28日　１区北東より遺構検出開始。
５月30日　ＳＥ3004の検出。転落石により上部が埋没した状況を確認。
６月10日　１区全景写真撮影。
６月12日　２区重機掘削開始。
６月17日　１区Ｃ16 Pit５より泥塔出土。
６月19日　２区遺構掘削開始。
７月２日　２区全景写真撮影。
７月８日　３区重機掘削開始。
７月10日　台風８号接近のため休工。
７月12日　現地説明会開催。
７月15日　３区遺構掘削開始。
７月16日　３区全景写真撮影。
７月17日　２区埋戻し開始。
７月19日　１区ＳＥ3005掘削作業と重機による断ち割り。３区埋戻し開始。
７月22日　２・３区埋戻し完了。
７月23日　１区ＳＥ3004掘削作業と重機による断ち割り。
７月25日　ＳＥ3004調査完了。１区埋戻し完了。
７月29日　現地協議(伊勢建設事務所・丸文工業)。埋戻し状況等の確認。
８月６日　完了検査の実施。

2015年（平成27年）

１月16日　第２次調査１・２区隣接地の工事立会を実施。

（4）文化財保護法にかかる諸手続

・県埋蔵文化財保護条例第48条第１項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（県教育長あて三重県知事通知）
　平成23年８月31日付　伊建第562号
・文化財保護法第99条第１項（県教育委員会教育長あて埋蔵文化財センター所長通知）
　平成26年５月９日付　教埋第47号
・文化財保護法第100号第２条「埋蔵文化財の発見・認定について」（大台警察署長あて県教育委員会委員長通知）
　平成26年８月14日付　教委第12-4417号

（5）普及公開

調査期間中には延べ85名の見学者があり、発掘調査成果の解説を行った（写真１）。

平成26年７月12日（土）に現地説明会を実施し84

名の参加があった。平成27年３月14日（土）の三重県埋蔵文化財センター嬉野分室で開催した発掘成果報告会「おもろいもんでましたんやわ@三重２０１４」では、遺物展示および解説を行い141名の参加があった。

２　調査の方法

（１）調査区設定

第３次調査地は遺跡範囲の南西端にあたる（第３・４図）。発掘調査は道路計画路線内のうち、範囲確認調査で遺構が確認された箇所を対象にした。調査区名は現道や水路を挟み、東から１～３区の名称を与えた。

遺物の取り上げ等に用いるグリッドは平面直角座標系（世界測地系）に即して設定したが、第１・２次調査とは独立したものである（第５図）。グリッドの割付は、調査区をすべてカバーできるように、X=－175,583m、Y=44,564mを原点とした４m方眼を設定し、X軸方向（西から東）は数字を、Y軸方向（北から南）はアルファベットを付与し、各北西角を小グリッドの名称とした（例：A３など）。

（２）遺構検出・掘削

表土から遺構面までの堆積土を重機（バックホー）で除去し遺構検出・掘削は人力で行った。井戸の断ち割り、大型遺構の掘削には重機を補助的に用いた。

１区の調査において、落ち込み状遺構（A18・19、B17～19）を検出した。サブトレンチをB18に設定し遺構の深度を確認したうえで、遺構掘削に重機を用いる判断をした。掘削後に土層の堆積を複数の職員で再度検討するなかで、遺構ではないという結論に至った。上記の範囲は誤認により遺構を破壊することとなり詳細を記すことができないため、該当範囲から出土した遺物は落ち込み状遺構としてまとめて報告する。

（３）遺構図面

遺構検出段階でグリット単位の１/40略測図（遺構カード）を作成し、これをもとに１/100の遺構略測図を作成することで、調査区全体の遺構配置を把握した。遺構平面図、土層断面図については１/20の手書き実測で行った。

井戸など各遺構の詳細な平面図及び立面図は、１/10の手書き実測を行った。なお、これらの図面、作業日誌は当センターで保管している。

遺構番号はピットを除き、全てに通し番号を付与した。なお、報告書作成にあたり、遺構番号の訂正を行っているが、原則として調査時の番号をそのまま用いている。ピットの遺構番号は、当センターの調査標準に従い小地区ごとの通し番号としている。

（４）出土遺物の管理

出土遺物は出土年月日と遺構の区別を行い、グリット単位で取り上げている。また、報告書掲載遺物（A遺物）と参考資料（B遺物）に分けて整理、保管している。

（５）写真撮影

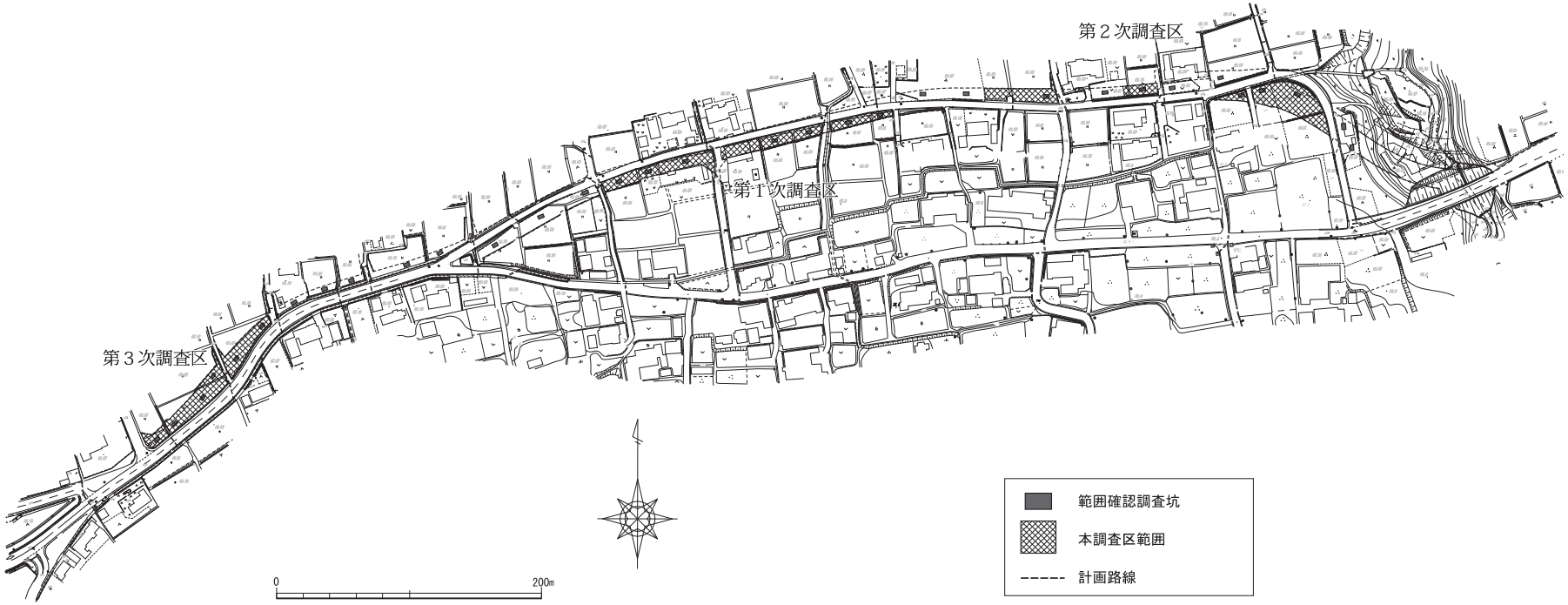
遺跡の調査写真について、調査全景や重要な個別遺構はブローニーの６×９判（モノクロ、カラーリバーサル）で撮影した。また、調査前状況や遺構、土層断面などは35㎜判（モノクロ、カラーリバーサル）を補助的に用いた。使用したカメラについて、６×９判はウィスタフィールド、35㎜判はニコンＦＭ２である。また、デジタルカメラでの撮影も適宜行った。

註

（１）三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第１次）発掘調査報告』、2014年

（２）三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第２次）発掘調査報告』、2015年

写真１　現地説明会風景



第１図　発掘調査位置図（1:5,000）

Ⅱ　位置と環境

地理的環境、歴史的環境は『第１次報告』、『第２次報告』で詳細な報告が成されているため、これまでの内容をもとに概要を記した。

１　地理的環境

（１）位置

野添大辻遺跡（１）は三重県度会郡大紀町にある縄文時代から中世の集落跡である（第２図）。大紀町（平成17年、２町１村が合併）は三重県南部にあり、その地形は宮川流域の山間部（旧大宮町・旧大内山村）と、熊野灘に面した海岸部（旧紀勢町）に大別される。遺跡は宮川流域の旧大宮町に所在し、宮川河口を30㎞遡上した標高約65ｍの地点に立地する。

宮川の右岸側にあたる七洞岳（778ｍ）や国見岩（734ｍ）などの山地は、古代伊勢国と志摩国の国境であった。これらの山岳より発する宮川支流の藤川を遡上し、藤坂峠を越えれば17㎞ほどで神前湾・贄湾に至る。また、大内山川を経て熊野街道をたどれば熊野三山に続く。当地は奥伊勢、志摩、熊野を結ぶ結節点にあたる。

（２）地質

宮川は、中央構造線外帯のうち三波川変成帯に属し、遺跡周辺の基盤岩は泥質片岩である。宮川上流や藤川・大内山川は秩父累帯を北流し、砂岩・泥岩・チャートなどを流域に供給している。

（３）宮川と段丘地形

宮川は三重県・奈良県境の大台ケ原を源流とし、中流域で大内山川・藤川・一之瀬川・横輪川などの支流を加えながら県南部を東流する。

宮川が大きく蛇行する中流域では河岸段丘が発達し、沖積平野は下流域にのみ形成されている。段丘面と宮川の高低差は約30ｍあり、深い渓谷状となる。

野添大辻遺跡はこの宮川中流の右岸段丘上に位置する。当地は宮川と藤川の合流点にあたり、比較的大きな段丘面が形成されている（第３図）。

２　歴史的環境

（１）旧石器～縄文時代

宮川中流域には旧石器から縄文時代の遺跡が数多く知られている。旧石器時代の遺跡は、宮川と支流の濁川の合流点にある出張遺跡（９）がある[1]。ナイフ形石器やスクレイパーなど製品のほか、多くの石核や剥片も出土している。

縄文時代は野添大辻遺跡のほか、大紀町神原の樋ノ谷遺跡（11）で縄文早期から晩期にかけての竪穴住居や土坑などが確認され[2]、早期の土器は押型文土器編年における神並上層式の代表例とされている。野手遺跡（２）は前期が主体で、早期～後期の土器・石器や玦状耳飾が採取されている。

（２）弥生時代～古代

当時期以降は、遺跡の分布が極端に減少する。大西遺跡（４）、引瀬遺跡（６）など小規模な弥生時代の散布地がある。古墳時代には滝原地区の長者野古墳群が知られている程度である。

当地の古代を語る上で重要なのは、皇大神宮の別宮にあたる滝原宮であるが、当地域では古代の遺跡についても詳細は不明である。

（３）中世

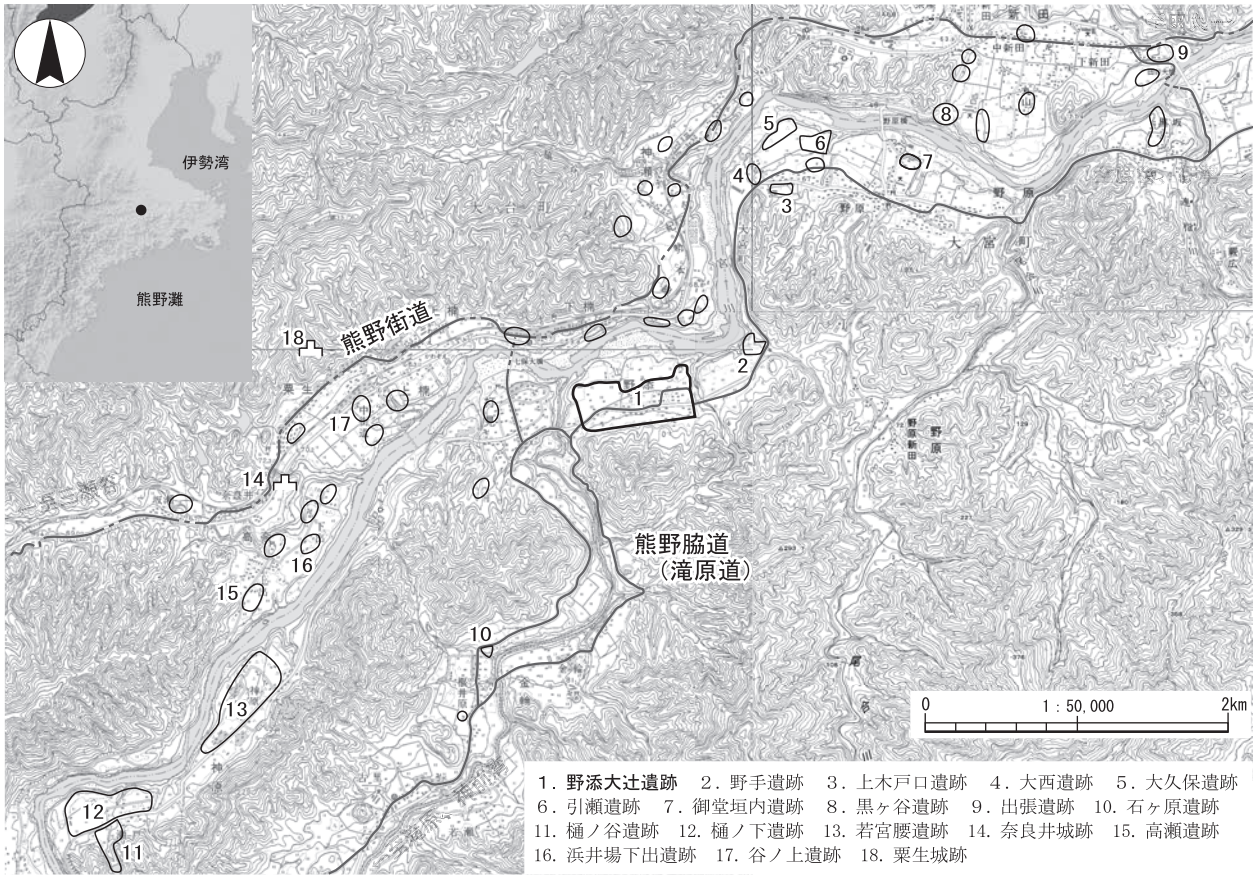
宮川左岸の川添地区には中世城館が見られる。奈良井城跡（14）は平地の居館で２か所に堀が確認される。粟生城跡（18）は、山地の尾根上に立地する14～15世紀の小規模な城館である。

隣接する大台町には、北畠氏ゆかりの史跡である三瀬館跡や下三瀬城跡が見られる。南北朝から戦国時代にかけて、この地域の南朝勢力の北畠氏が勢力を広げ、支配を確立していった。

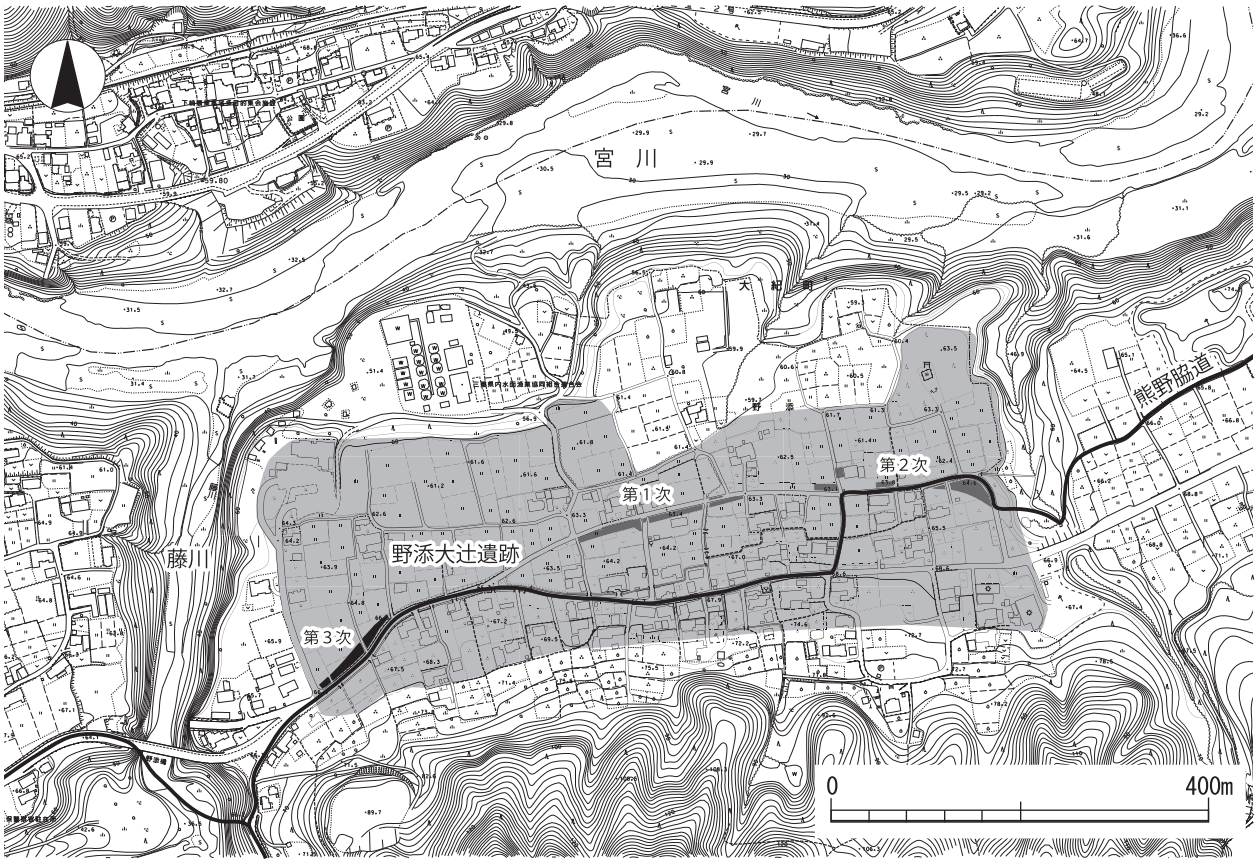
註

（１）大台町出張遺跡調査会『出張遺跡調査報告書』、1979年

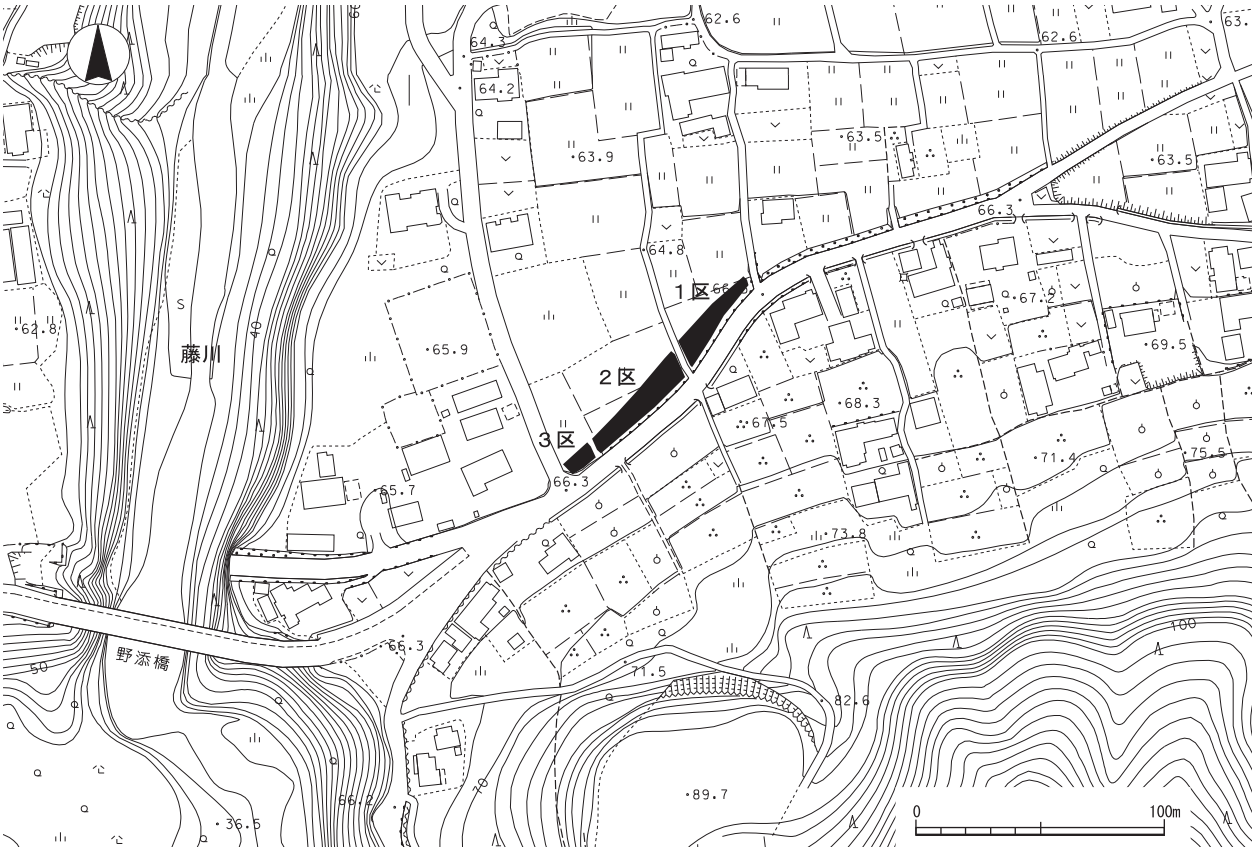
（２）三重県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告（樋ノ谷遺跡）』、1983年



第２図　遺跡分布図（1:50,000、国土地理院発行1:25,000数値地図に加筆）



第３図　遺跡周辺地形図（1:8,000）



第４図　調査区位置図（1:3,000）

第５図　グリッド割付図（1:800）

Ⅲ　遺　構

1　基本層序と微地形

（1）基本層序

基本層序は以下の通りである。なお、第１～３次調査区間の層序の対比は、土層柱状図および対照表に示した（第８・９図、第１表）。

Ⅰ：現代耕土・床土等（表土）

Ⅱ：近世～近代の旧耕土や整地層等

Ⅲ：中世の遺物包含層（黒ボク土等を起源）

Ⅳ：黒ボク土

Ⅴ：褐灰色～暗黄灰色シルト

Ⅵ：明黄褐色粘土～極細砂（地山）

Ⅰ層は表土で、水田・畑の耕土・床土である。Ⅱ層は近世～近代の旧耕土や整地層等で、各層の間に後背の丘陵からの流出土とみられる黄褐色砂礫が挟まれることがある。

Ⅲ層は主に黒ボク土を起源とする土壌ないし耕作土である。中～近世の耕作等に起因する層であろう。層中には中世の遺物が含まれ、稀に本層の上面から切り込む中世遺構が認められる。しかし、各所で風倒木や根株跡が確認されるほか、下面は生痕が著しいため、本層上での遺構の把握は困難であった。

Ⅳ層はいわゆる黒ボク土である。砂礫などの混入物は非常に少ない。本層は便宜的に上位・中位・下位に区分したが、層相の下方変化は漸移的である。なお、第２・３次調査では本層の上・中位からはK-Ah(6,300BP）とみられるテフラが検出されており、第１次調査で確認された縄文早期の遺構との関係で注目される。

Ⅴ層は地山である段丘堆積物の直上に形成された土層である。本層の上面が第１次調査の縄文早期遺構検出面に対応する。土壌分析ではテフラは検出されなかったことから、本層はK-Ahの降灰以前に形成された層であると推測される。

Ⅵ層は段丘の堆積物である黄褐色系粘土または極細砂である。表層は礫などを含まず、風化がよく進んだ均質な粘土層であるが、下層は拳大前後の礫を多く含んだ砂礫層となり、標高約61.5m付近で非常に硬い不透水の浅黄色砂層となる。１区における井戸の断ち割り調査により、この礫を含む砂礫層が透水層となり、井戸の湧水層として利用されていたことが判明した。

（2）調査地の微地形

調査前の土地利用は１～３区は耕作地である。中世遺構面のⅣ層及び地山のⅥ層は、南西から北東にかけて緩やかに低くなる。Ⅵ層の標高は３区南西端で約64.9m、１区北東端で約63.8mである。

遺跡全体でⅣ～Ⅵ層の標高を比較すると、第２次調査１・２区が64～66m程と最も高く、第２次調査３～５区にかけて約61～62m程と最も低くなる。第１次調査区は63m前後で高低差が小さく、さらに西側の第３区にかけて緩やかに傾斜する地形となる。

（3）遺構検出面

１～３区の遺構はⅣ層上面を検出面とした。２区ではⅣ層の上面で遺構検出を行ったが、基盤となる黒ボク土の遺存状況が悪く、部分的な範囲でⅤ層の上面で検出を行った。なお、１～３区では調査終了前にⅥ層上面での下層遺構確認を行ったが、遺構・遺物は認められなかった。

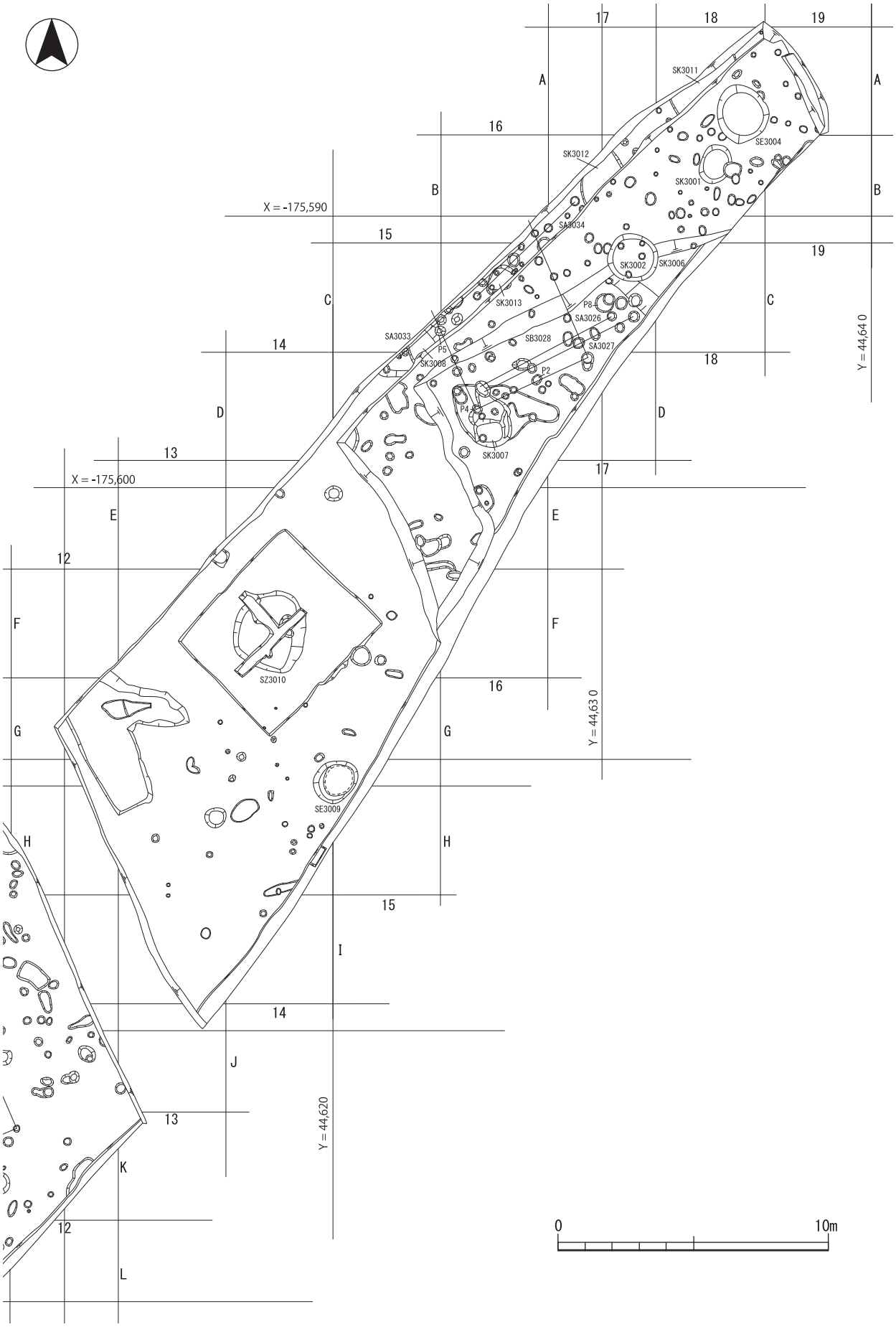
2　遺構

（1）検出遺構の概要

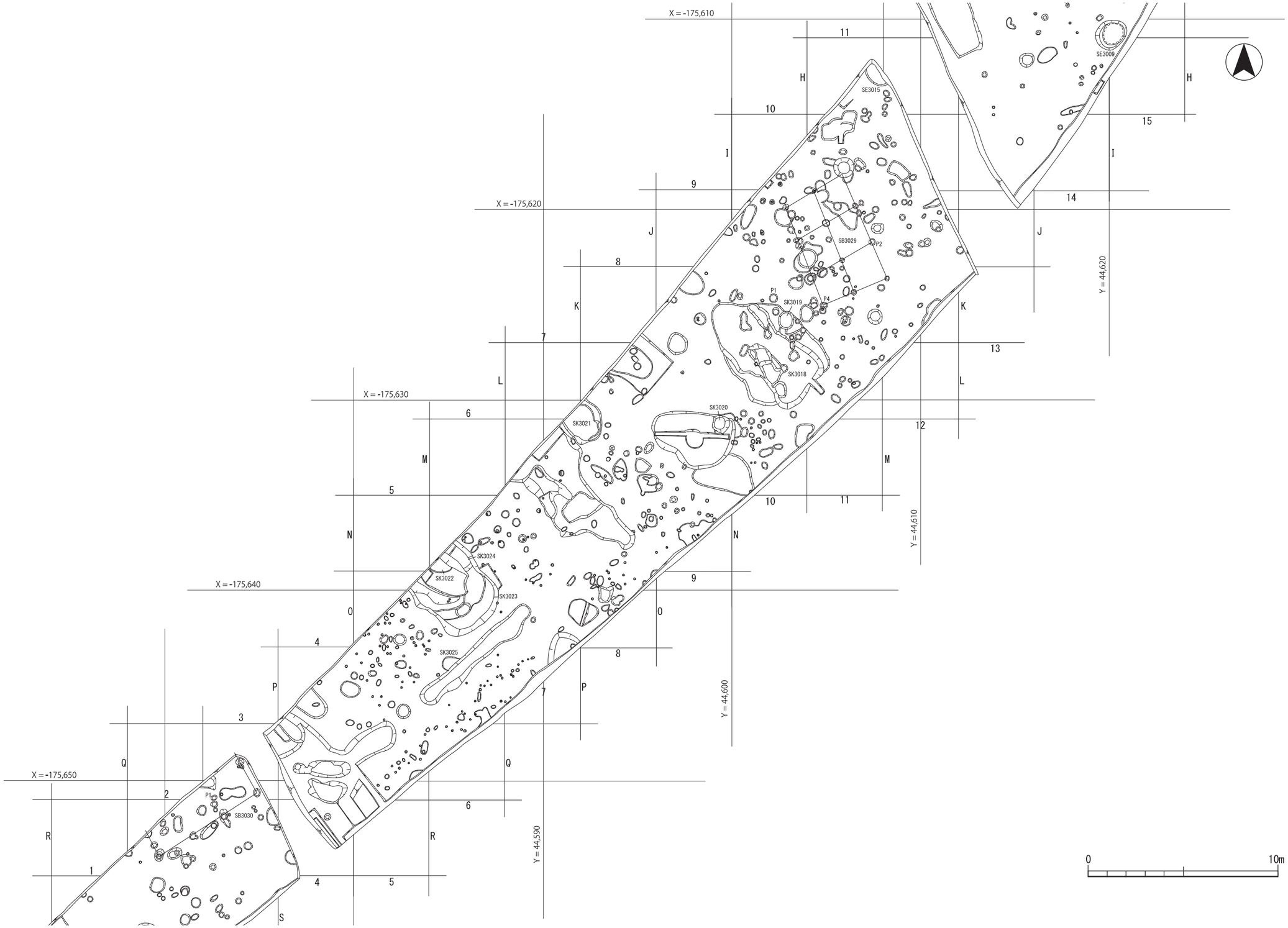
今回の調査では主に室町時代（戦国期）の遺構を検出した。第２次調査の様相に近く、15世紀代の遺構・遺物が多くみられた第１次調査とは遺構の様相が若干異なる。また、縄文時代早期の遺構は確認できなかった。

１～３区は地形や遺構の様相が近似するため、まとめて報告を行う。文中で触れていない遺構の属性については、章末の遺構一覧表を参照されたい。

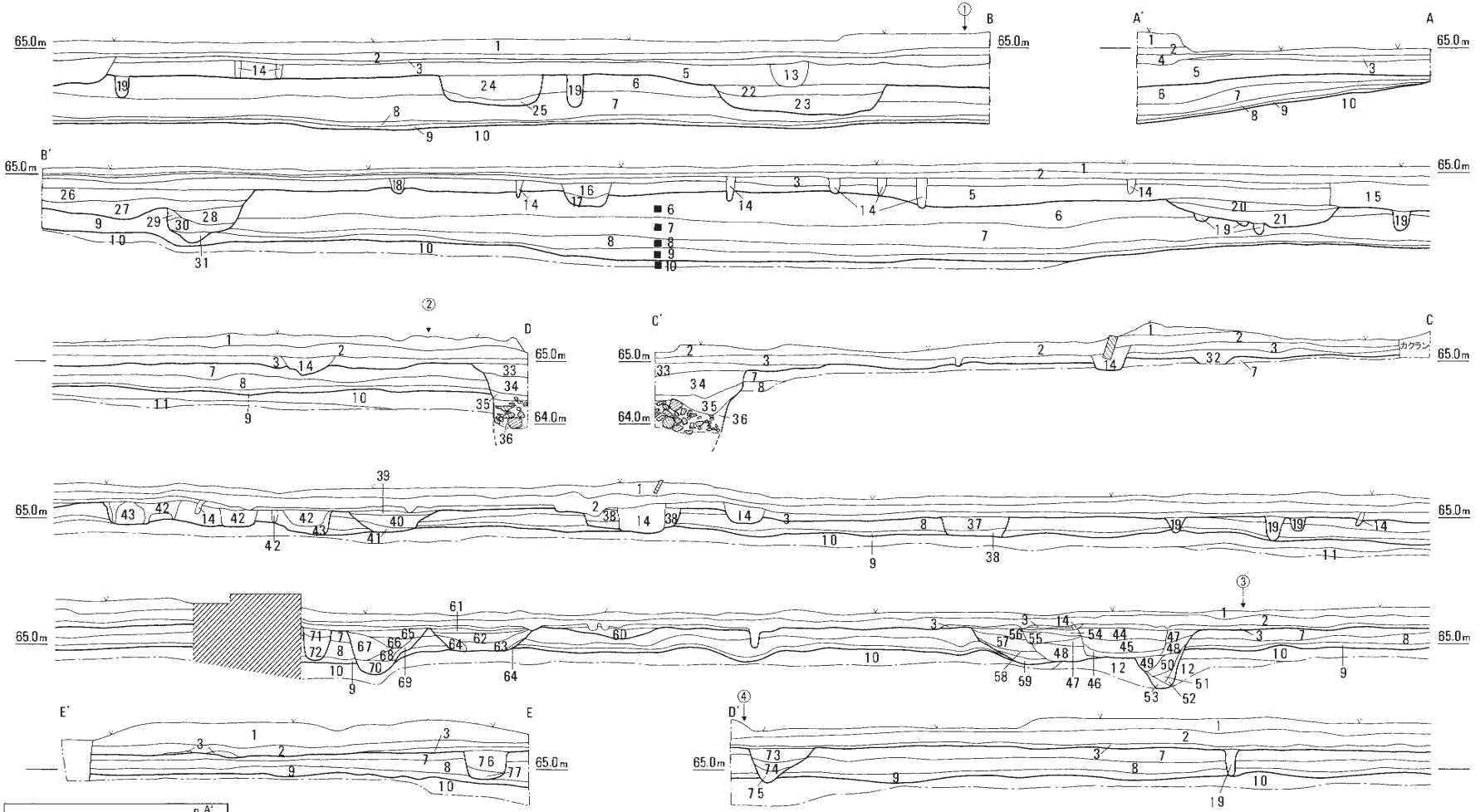
なお、中世の遺構の時期は伊藤裕偉氏による中世土器の編年に従い、南伊勢中世（以下、「中世」）Ⅱ～Ⅳ期と表記する。概ね中世Ⅱ＝平安末～鎌倉時代、中世Ⅲ＝室町時代（戦国期以前）、中世Ⅳ＝戦国期に相当する[1]。

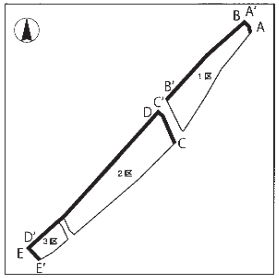


第６図　１区遺構平面図（1:200）



第７図　２区遺構平面図（1:200）

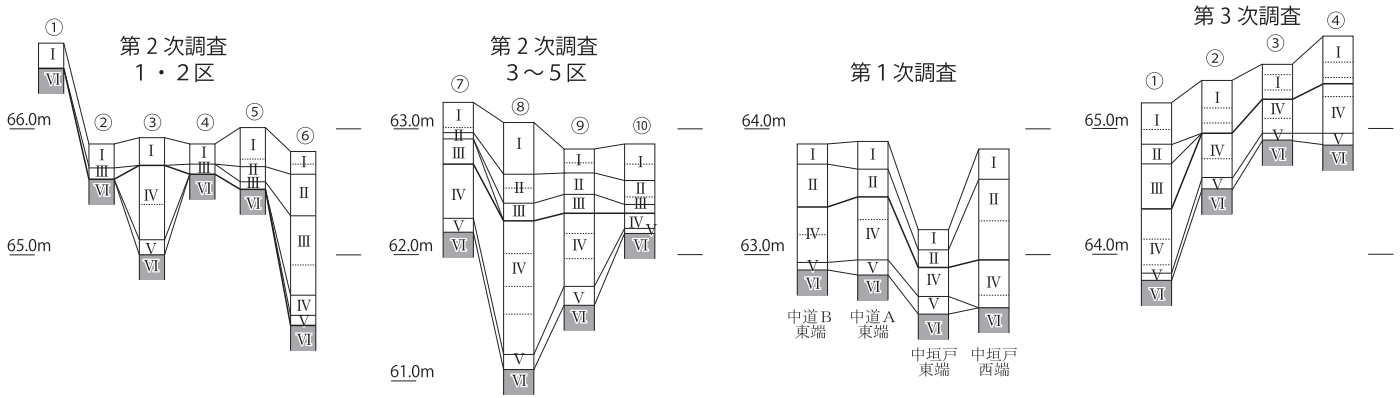




第１表　基本層序対照表

	1～3区
Ⅰ：現代耕土・床土・盛土等	1～3層
Ⅱ：近世～近代耕土・整地層等	4層
Ⅲ：Ⅳ層以下の土壌化層（中世の遺物を包含）	5層
Ⅳ：黒ボク土（中世遺構の基盤層で、下方変化は漸移的。便宜的に上位・中位・下位に分層。上・中位はK-Ahを含む）	6～8層
Ⅴ：褐灰色～暗黄灰色シルト（第１次調査の縄文早期遺構面に対応）	9層
Ⅵ：明黄褐色粘土～極細砂（地山）	10～12層

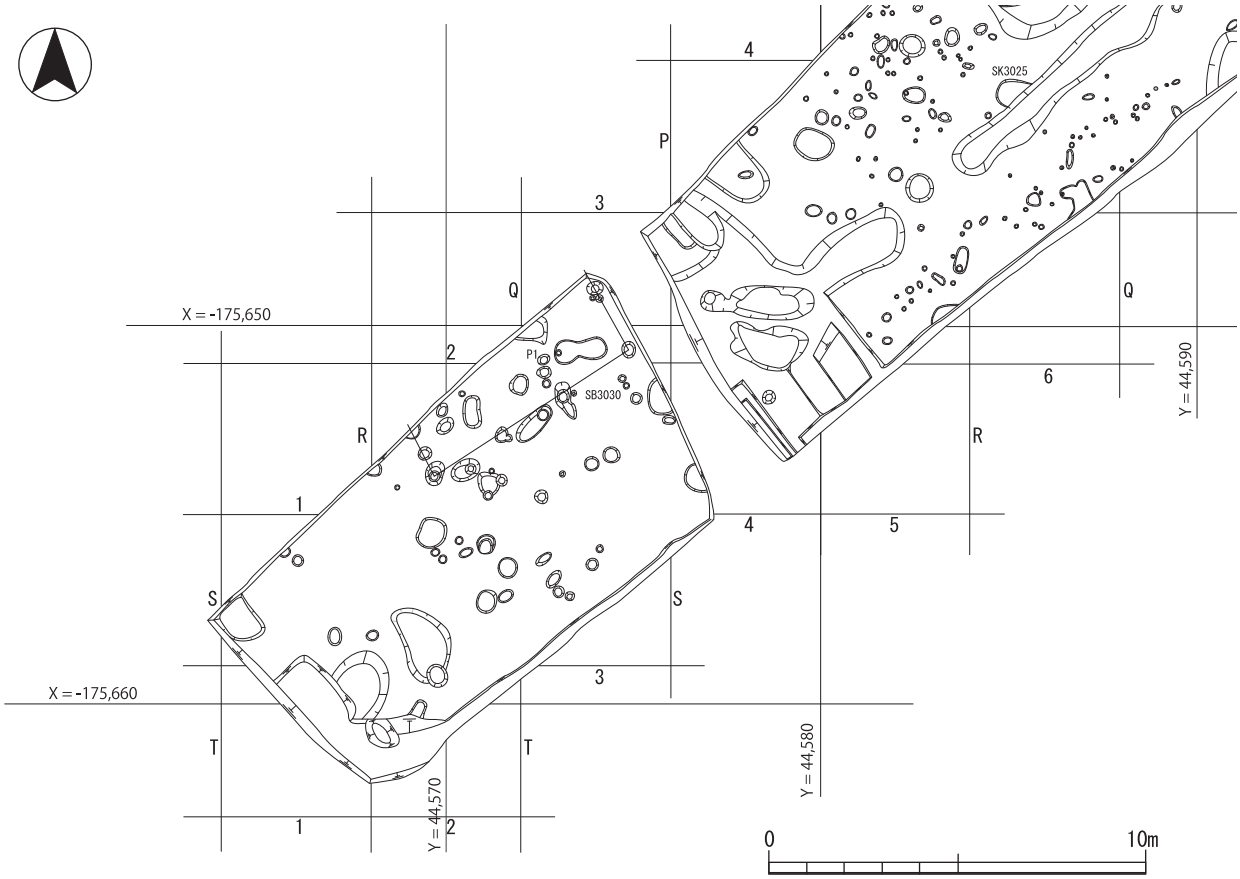
第８図　調査区土層断面図（1:100）



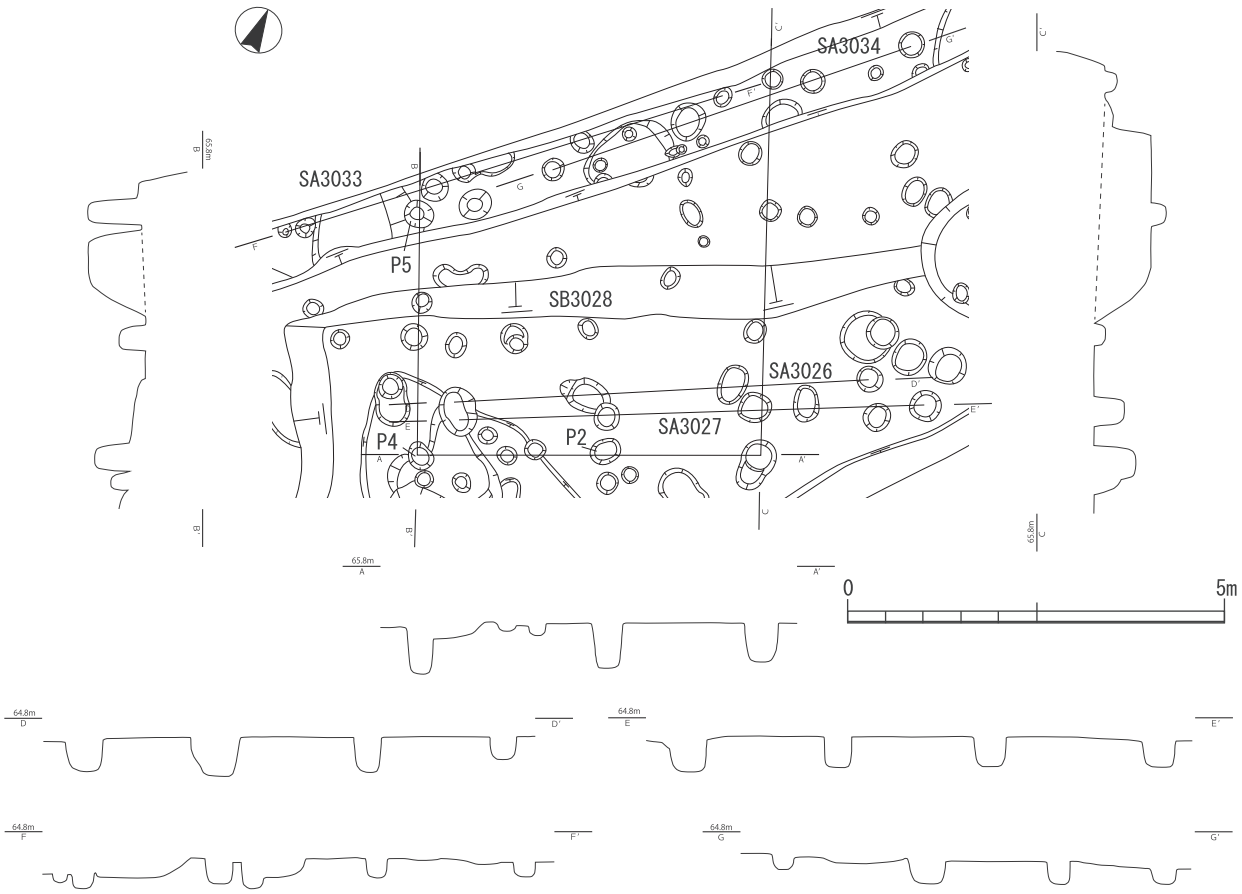
第９図　調査区土層柱状図（1:60）

１～３区　土層断面図注記

1　5Y5/1灰色粗砂混じりシルト層（現代耕土）
2　5Y6/1灰色シルト～極粗砂層（５～10㎜の中礫を多く含む、旧耕土）
3　2.5Y5/1黄灰色シルト層（床土）
4　10YR5/2灰黄褐色極粗砂層（20～30㎜の中礫を20％含む、撹乱）
5　10YR4/1褐灰色極粗砂～細礫層（中世包含層）
6　2.5Y2/1黒色シルト層（極粗砂を25％含む、黒ボク土上位）
7　5Y2/1黒色シルト層（黒ボク土中位）
8　5Y2/1黒色シルト層（5Y7/2灰白色シルトブロック５％、５㎜の中礫５％含む、黒ボク土下位）
9　2.5Y5/2暗灰黄色シルト層（2.5Y7/3浅黄色シルトブロック25％含む）
10　2.5Y6/4にぶい黄色粘土層（地山）
11　2.5Y6/4にぶい黄色大礫混じり中礫層（地山）
12　2.5Y7/3浅黄色細砂層（地山）
13　10YR6/6明黄褐色シルト層
14　10YR4/1褐灰色シルト層（５㎜の中礫を５％含む）
15　10YR3/1黒褐色シルト層（10YR7/6明黄褐色シルトブロック１％含む）
16　10YR2/2黒褐色シルト層（土坑埋土）
17　2.5Y5/1黄灰色シルト層（土坑埋土）
18　10YR2/3黒褐色シルト層（Pit埋土）
19　2.5Y4/1黄灰色シルト層（５㎜の中礫を５％含む）
20　2.5Y5/1黄灰色シルト層（５～10㎜の中礫を10％含む、SK3008埋土）
21　2.5Y4/1黄灰色シルト層（SK3008埋土）
22　2.5Y6/1黄灰色極細砂層（2.5Y8/3淡黄色シルトブロック５％含む、SK3011埋土）
23　2.5Y4/1黄灰色極細砂層（SK3011埋土）
24　2.5Y4/1黄灰色シルト層（５～10㎜の中礫を25％含む）
25　2.5Y8/4淡黄色シルト層（2.5Y5/1黄灰色シルトブロック25％含む）
26　2.5Y3/1黒褐色シルト層（風倒木埋土）
27　2.5Y4/1黄灰色シルト層（50㎜の中礫を５％含む、風倒木埋土）
28　10YR3/1黒褐色シルト層（30～50㎜の中礫を１％含む、風倒木埋土）
29　2.5Y7/3浅黄色シルト層（50～100㎜の中・大礫を25％含む、風倒木埋土）
30　2.5Y5/2暗灰黄色シルト層
（2.5Y7/3浅黄色シルトブロック５％、５～10㎜の中礫を５％含む、風倒木埋土）
31　2.5Y3/1黒褐色シルト層
（極粗砂を多量に含む、３～５㎜の中礫を25％含む、風倒木埋土）
32　2.5Y6/2灰黄色シルト層（2.5Y3/1黒褐色シルトブロック５％含む）
33　2.5Y4/1黄灰色シルト層（SE3015埋土）
34　2.5Y4/1黄灰色シルト層
（100～200㎜の大礫を５％、2.5Y3/1黒褐色シルトブロック５％含む、SE3015埋土）
35　2.5Y5/1黄灰色シルト層（５～10㎜の中礫を25％含む、SE3015埋土）
36　2.5Y5/1黄灰色極粗砂混じりシルト層
（100～200㎜の大礫を多量に含む、SE3015埋土）
37　2.5Y4/1黄灰色シルト層（土坑埋土）
38　2.5Y4/1黄灰色シルト層（５㎜の中礫を25％含む、土坑埋土）
39　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
40　10YR2/1黒色シルト層（５～10㎜の中礫を25％含む、土坑埋土）
41　10YR2/1黒色シルト層（土坑埋土）
42　2.5Y3/1黒褐色シルト層（風倒木埋土）
43　2.5Y5/1黄灰色シルト層（風倒木埋土）
44　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
45　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
46　2.5Y3/1黒褐色シルト層（2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロックを５％含む、土坑埋土）
47　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
48　2.5Y3/1黒褐色シルト層（10～20㎜の中礫を10％含む、土坑埋土）
49　2.5Y4/2暗灰黄色シルト層（10～20㎜の中礫を10％含む、土坑埋土）
50　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
51　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
52　2.5Y4/2暗灰黄色シルト層（2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロックを10％含む、土坑埋土）
53　2.5Y4/2暗灰黄色シルト層（土坑埋土）
54　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
55　2.5Y4/2暗灰黄色シルト層（2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロックを20％含む、土坑埋土）
56　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
57　2.5Y3/1黒褐色シルト層（2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロック10％含む、土坑埋土）
58　2.5Y3/1黒褐色シルト層（2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロック10％含む、土坑埋土）
59　2.5Y3/2黒褐色シルト層（土坑埋土）
60　2.5Y3/1黒褐色シルト層（2.5Y4/1黄灰色シルトブロック20％含む、土坑埋土）
61　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
62　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
63　2.5Y3/1黒褐色シルト層（2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック10％含む、土坑埋土）
64　2.5Y4/2暗灰黄色シルト層（土坑埋土）
65　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
66　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
67　2.5Y3/2黒褐色シルト層（2.5Y6/3にぶい黄色シルトブロック10％含む、土坑埋土）
68　2.5Y3/1黒褐色シルト層（土坑埋土）
69　2.5Y4/2暗灰黄色シルト層（2.5Y6/6明黄褐色シルトブロック10％含む、土坑埋土）
70　2.5Y3/2黒褐色シルト層（2.5Y6/6明黄褐色シルトブロック10％含む、土坑埋土）
71　7.5Y6/1灰色シルト層（7.5Y4/1灰色シルトブロック５％含む、土坑埋土）
72　7.5Y6/1灰色シルト層（３㎜の中礫を25％含む、土坑埋土）
73　2.5Y4/1黄灰色シルト層（土坑埋土）
74　2.5Y3/2黒褐色シルト層（土坑埋土）
75　2.5Y2/1黒色シルト層（2.5Y6/6明黄褐色シルトブロック10％含む、土坑埋土）
76　2.5Y5/2暗灰黄色シルト層
（2.5Y5/1黄灰色シルトブロック20％、１～２㎜の極粗砂を５％含む、土坑埋土）
77　2.5Y4/1黄灰色シルト層（土坑埋土）



第10図　３区遺構平面図（1:200）



第11図　１区掘立柱建物・柱列遺構図（1:100）

（２）１～３区の遺構（第６・７・10図）

本調査区では、主に中世Ⅳ期の遺構が認められた。遺構は１区と２区北東側、３区北東側に比較的多く確認された。２区は調査区中央から南西にかけ、遺物が希薄となる。

①掘立柱建物・柱列（写真図版４・５）

１区で建物１棟と柱列４条、２区で建物１棟、３区で建物１棟を確認した。

ＳＢ3028（第11図）

１区中央で検出した掘立柱建物で、３間×２間以上の側柱建物と考えられる。桁行5.1m、梁行4.5m以上で、主軸の方位はN26°Ｗをとる。柱穴からは15世紀後半～16世紀前半の土師器皿・鍋（２～４）が出土した。後述するＣ16 Pit５からは泥塔（１）が出土している。

ＳＢ3028 Ｃ16 Pit５（第13図、巻頭図版１・２）

ＳＢ3028の柱穴と考えられ、平面形は直径42cmの円形で、深さ67.5cmである。第１層では、柱穴北側の位置で、泥塔（１）が正立した状態で出土した。出土状況から泥塔は柱が抜き取られた後に、柱穴を埋め戻す過程で柱穴内に安置されたと推定される。

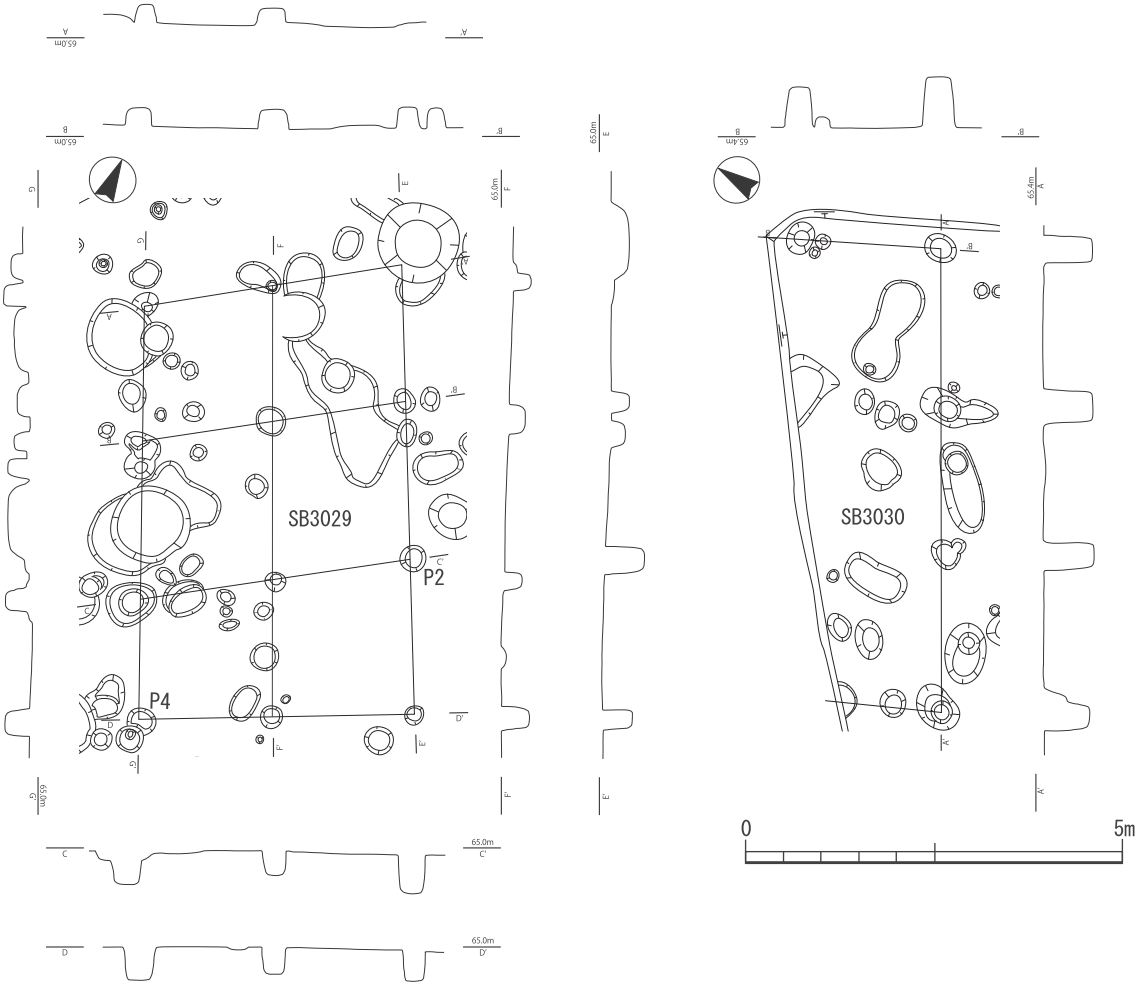
埋土からは、泥塔の他に中世Ⅳ期と見られる土師器鍋の小片が出土した。詳細な時期特定は困難であるが、15世紀中頃～16世紀前半の範疇に収まると考えられる。

ＳＢ3029（第12図）

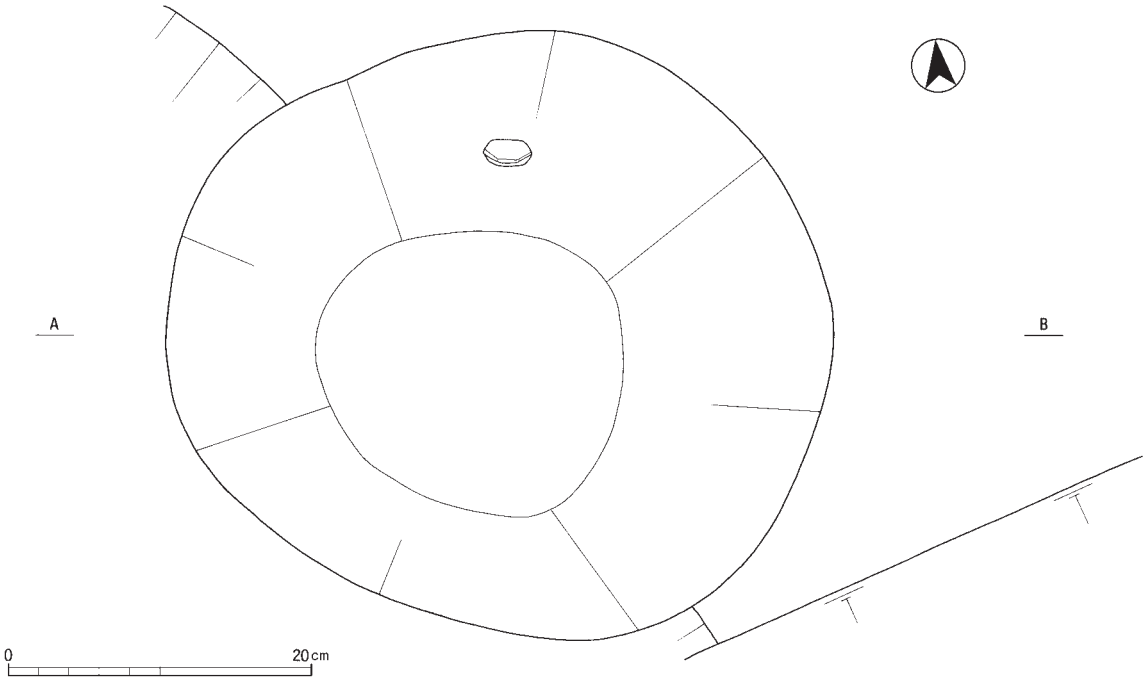
２区北側で検出した掘立柱建物で、３間×２間の総柱建物と考えられる。桁行5.7m、梁行3.6mで、主軸の方位はN22°Ｗをとる。柱穴からは16世紀前半の土師器皿・鍋（５・６）が出土した。

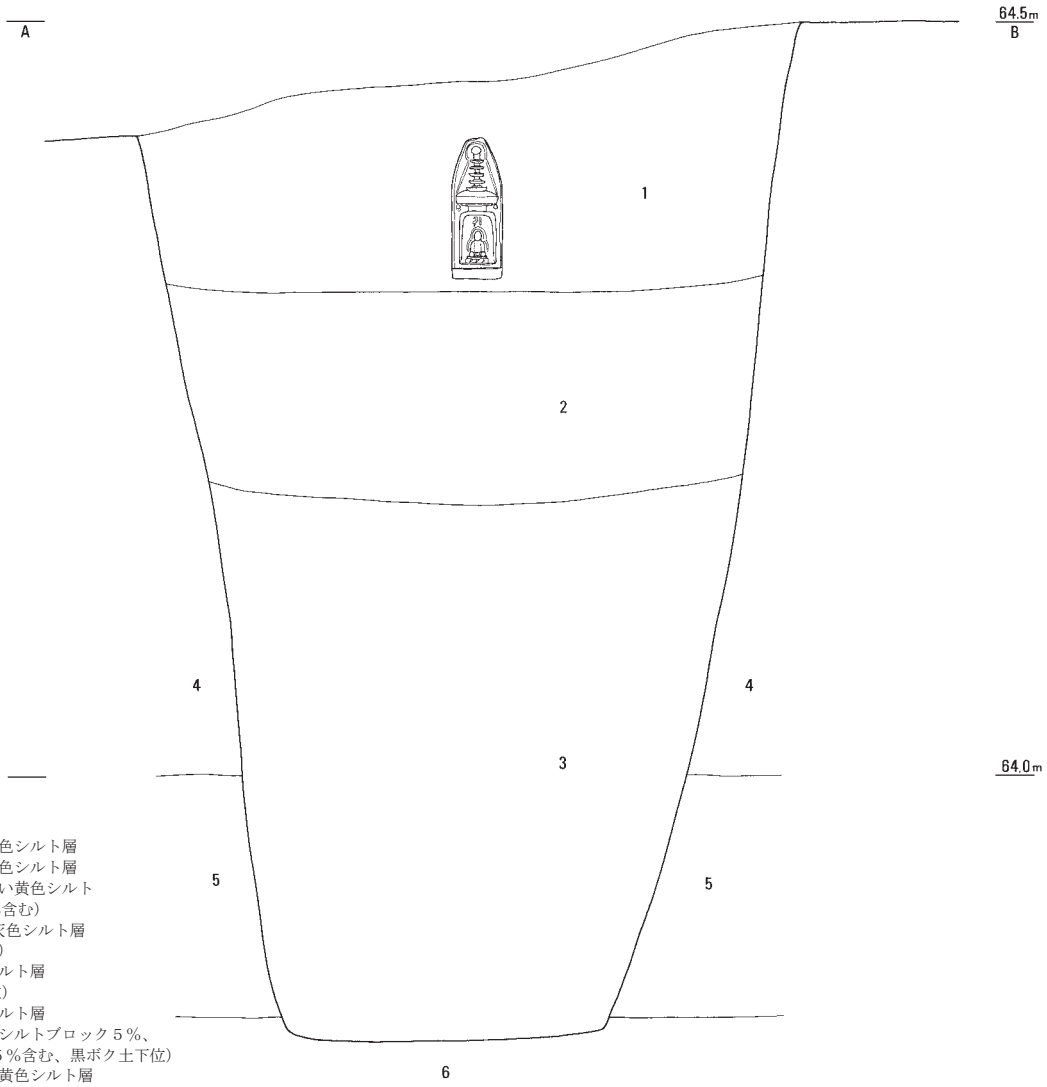
ＳＢ3030（第12図）

３区北側で検出した掘立柱建物で、３間×１間以上の側柱建物と考えられる。桁行6.3m、梁行1.8m以上で、主軸はN57°Ｅをとる。柱穴からは中世Ⅳ期とみられる土師器小片が出土している。



第12図　２・３区掘立柱建物遺構図（1:100）





C16 Pit5

1．10YR2/1 黒褐色シルト層
2．10YR2/1 黒褐色シルト層
（10YR7/3 にぶい黄色シルトブロック１％含む）
3．2.5YR5/1 褐灰色シルト層
（粗砂 5％含む）
4．5Y2/1 黒色シルト層
（黒ボク土中位）
5．5Y2/1 黒色シルト層
（5Y7/2 灰白色シルトブロック５％、５㎜の中礫５％含む、黒ボク土下位）
6．2.5Y5/2 暗灰黄色シルト層
（2.5Y7/3 浅黄色シルトブロック 25％含む）

第13図　C16 Pit５泥塔出土状況図（1:5）

ＳＡ3026（第11図）

１区中央の柱列で、３間分（5.6m）を検出した。主軸はN64°Ｗをとる。中世Ⅳ期と見られる土師器皿等が出土している。

ＳＡ3027（第11図）

１区中央の柱列で、３間分（6.3m）を検出した。主軸はN64°Ｗをとる。中世Ⅳ期と見られる土師器小片が出土している。

ＳＡ3033（第11図）

１区中央の柱列で、３間分（6.1m）を検出した。主軸はN46°Ｗをとる。

ＳＡ3034（第11図）

１区中央の柱列で、３間分（5.1m）を検出した。主軸はN46°Ｗをとる。

②井戸

１区で２基、２区で１基の井戸を確認した。

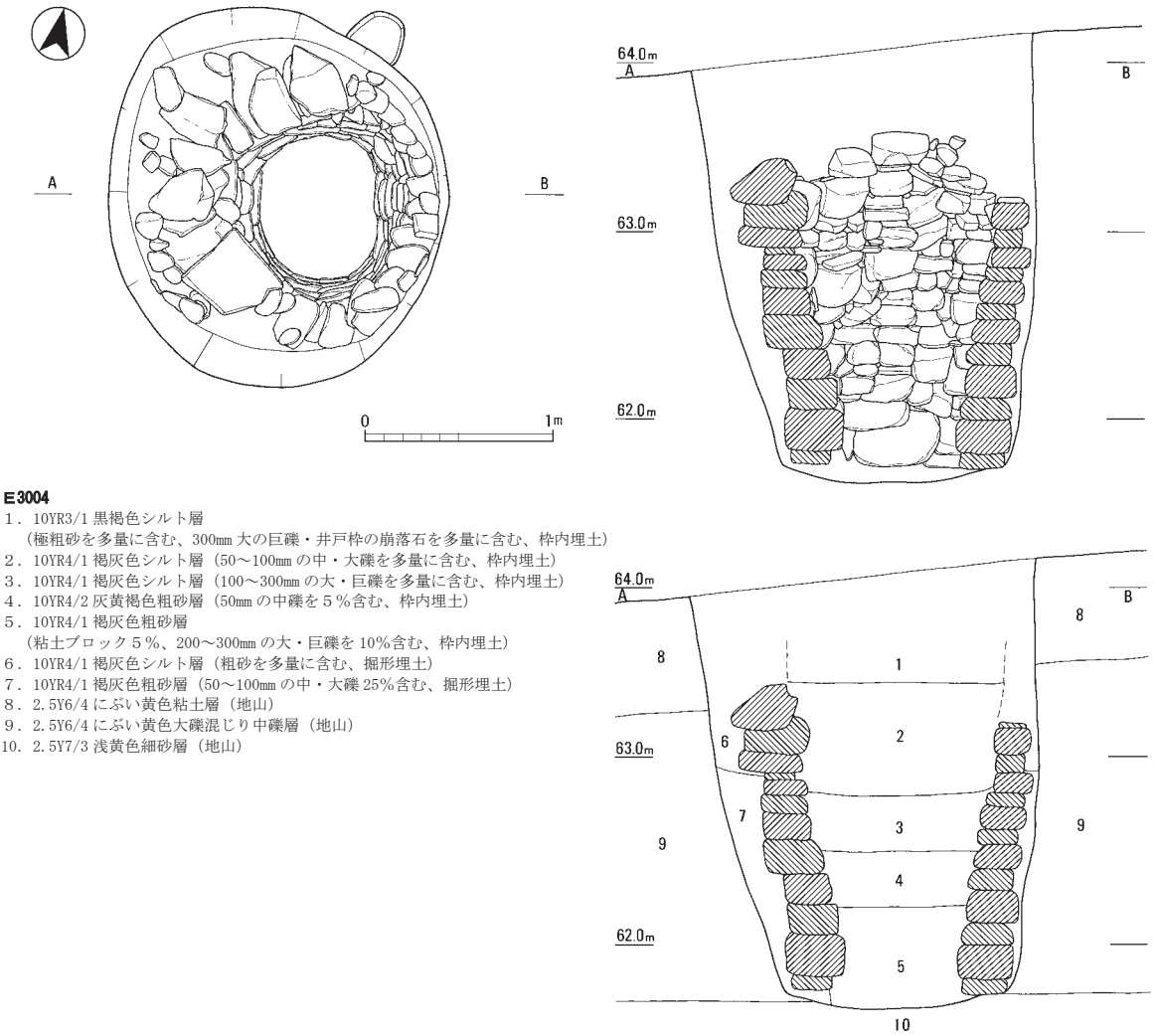
ＳＥ3004（第14図、写真図版６・７）

１区北側で検出した石組の井戸で、掘形の直径1.8～２m、石組の内径0.6～1.0m、深さ約2.9mを測る。検出段階で上端から約0.5～1.0mの石組が崩落していたため、この範囲の石組の構造は確認できなかった。

石組はチャートや砂岩のやや扁平な亜角礫を小口積みして構築するが、最下段のみ大型の石を長手に据えている。石組の裏込め土は約５～20㎝厚であり、井戸上部から下部に向けて薄くなる。井戸の最下部には水溜や浄水施設としての礫敷きなどは確認できなかった。

掘形は水を通さない硬い細砂層まで掘られている。この細砂より上層の黄色砂礫層が透水層であり、周囲から水が集まってくる。

井戸の埋土から、16世紀前半の土師器皿・鍋（11



ＳＥ3004

1．10YR3/1 黒褐色シルト層
（極粗砂を多量に含む、300㎜ 大の巨礫・井戸枠の崩落石を多量に含む、枠内埋土）
2．10YR4/1 褐灰色シルト層（50～100㎜ の中・大礫を多量に含む、枠内埋土）
3．10YR4/1 褐灰色シルト層（100～300㎜ の大・巨礫を多量に含む、枠内埋土）
4．10YR4/2 灰黄褐色粗砂層（50㎜ の中礫を５％含む、枠内埋土）
5．10YR4/1 褐灰色粗砂層
（粘土ブロック５％、200～300㎜ の大・巨礫を 10％含む、枠内埋土）
6．10YR4/1 褐灰色シルト層（粗砂を多量に含む、掘形埋土）
7．10YR4/1 褐灰色粗砂層（50～100㎜ の中・大礫 25％含む、掘形埋土）
8．2.5Y6/4 にぶい黄色粘土層（地山）
9．2.5Y6/4 にぶい黄色大礫混じり中礫層（地山）
10．2.5Y7/3 浅黄色細砂層（地山）

第14図　ＳＥ3004遺構図（1:40）

～21）が出土した。

構造が類似するものに『第２次報告』で確認されたＳＥ2035が挙げられる。ＳＥ2035ではケヤキの丸太を刳り貫いた水溜を据える違いはあるものの、石組の基本的な構造は同じものである。

ＳＥ3009（第15図、写真図版８）

１区南側で検出した井戸で、掘形の直径1.5～1.7m、内径1.1mである。下層の地盤が不安定のため検出面より2.6mの湧水地点で掘削を中止した。石組による土止め施設が確認できないことから、木製井戸枠があったものと推定される。

井戸埋土からは土師器皿、山茶椀、灰釉陶器壺（22～25）が出土し、時期は14世紀後半と考えられる。

ＳＥ3015（第７図、写真図版８）

２区北側で検出した石組井戸で、遺構の大半が調査区外へ広がるため直径、深さは不明である。調査区壁面が不安定なため検出面より深さ1.0mで掘削を中止した。

石組はチャートや砂岩のやや扁平な亜角礫を小口積みして構築する。掘削深度の都合により、石組の構造は不明である。

井戸の埋土から、16世紀前半の土師器皿・鍋・羽釜（26～33）などが出土した。

③土坑（第16図、写真図版８）

ＳＫ3001

１区北側で検出した楕円形土坑で、規模が1.5×1.0m、深さ25cmを測る。出土遺物には中世Ⅲ期の土師器皿・鍋（34・35）がある。

ＳＫ3006

１区北側で検出した土坑である。調査時の削平により、形態は不明である。出土遺物には16世紀前半の土師器鍋（36～38）がある。

ＳＫ3007

１区中央で検出した不整形土坑で、規模が1.9×1.3m、深さ20cmを測る。出土遺物には中世Ⅳa期の土師器皿（39）がある。

ＳＫ3008

１区中央で検出した土坑で、土坑の東側が削平されたため規模は2.4×0.7m以上、深さ32cmと考えられる。出土遺物には中世Ⅲ期の土師器皿、古瀬戸天目茶椀（40～44）がある。

ＳＫ3011

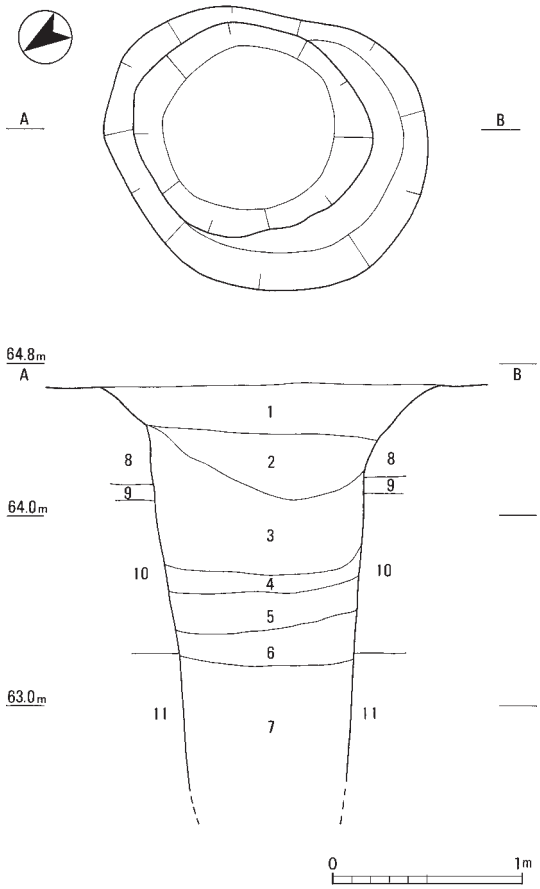
１区北側で検出した土坑で、土坑の東側が削平されたため規模は3.0×0.7m以上、深さ40cmと考えられる。出土遺物には中世Ⅲ期の土師器皿・鍋、常滑産甕（45～59）などがある。

ＳＫ3012

１区北側で検出した土坑で、土坑の東側が削平されたため規模は2.0×0.7m以上、深さ50cmと考えられる。出土遺物には青磁椀（60）の小片がある。

ＳＫ3021

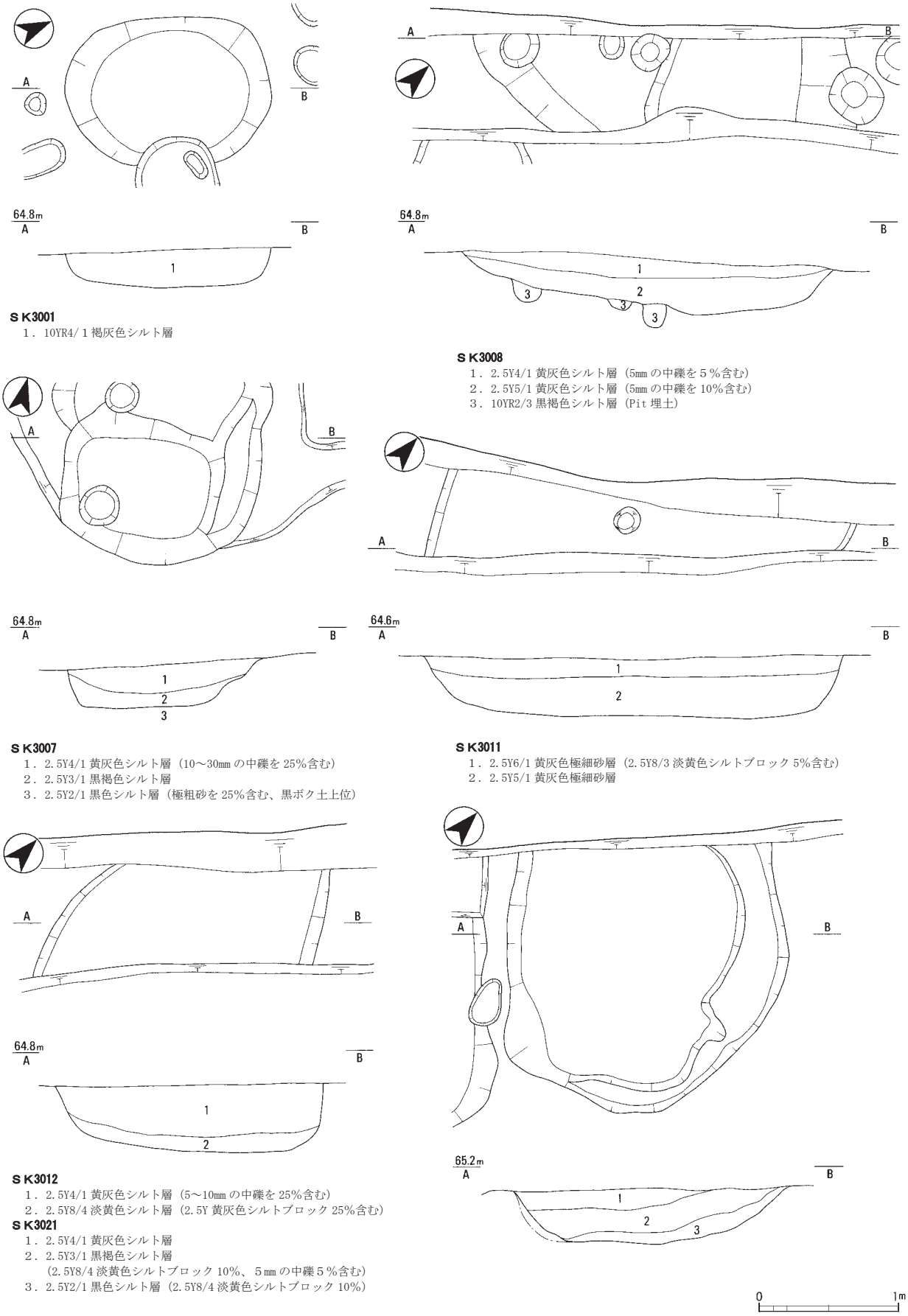
２区の中央で検出した楕円形土坑で、規模は2.6×2.2m、深さ42cmを測る。出土遺物には尾張型６型式の山茶椀（62）がある。



ＳＥ3009

1．2.5Y4/1 黄灰色シルト層（20～50mm の中礫を５％含む）
2．2.5Y4/1 黄灰色シルト層（20～50mm の中礫を 50%含む）
3．5Y2/1 黒色シルト層（100～200mm の大礫を５％含む）
4．2.5Y4/1 黄灰色シルト層
5．2.5Y5/1 黄灰色シルト層（粗砂～細礫を多量に含む）
6．2.5Y6/2 灰黄色極粗砂～細礫層
7．2.5Y5/1 黄灰色粘土層（100～200mm を多量に含む）
8．5Y2/1 黒色シルト層（5Y7/2 灰白色シルトブロック５％、５mm の中礫５％含む、黒ボク土下位）
9．2.5Y5/2 暗灰黄色シルト層（2.5Y7/3 浅黄色シルトブロック 25%含む）
10．2.5Y6/4 にぶい黄色粘土層（地山）
11．2.5Y6/4 にぶい黄色大礫混じり中礫層（地山）

第15図　ＳＥ3009遺構図（1:40）



ＳＫ3001
1．10YR4/１褐灰色シルト層

ＳＫ3008
1．2.5Y4/1 黄灰色シルト層（5mm の中礫を５％含む）
2．2.5Y5/1 黄灰色シルト層（5mm の中礫を 10%含む）
3．10YR2/3 黒褐色シルト層（Pit 埋土）

ＳＫ3007
1．2.5Y4/1 黄灰色シルト層（10～30mm の中礫を 25%含む）
2．2.5Y3/1 黒褐色シルト層
3．2.5Y2/1 黒色シルト層（極粗砂を 25%含む、黒ボク土上位）

ＳＫ3011
1．2.5Y6/1 黄灰色極細砂層（2.5Y8/3 淡黄色シルトブロック 5%含む）
2．2.5Y5/1 黄灰色極細砂層

ＳＫ3012
1．2.5Y4/1 黄灰色シルト層（5～10mm の中礫を 25%含む）
2．2.5Y8/4 淡黄色シルト層（2.5Y 黄灰色シルトブロック 25%含む）

ＳＫ3021
1．2.5Y4/1 黄灰色シルト層
2．2.5Y3/1 黒褐色シルト層
（2.5Y8/4 淡黄色シルトブロック 10%、５mm の中礫５％含む）
3．2.5Y2/1 黒色シルト層（2.5Y8/4 淡黄色シルトブロック 10%）

第16図　ＳＫ3001・3007・3008・3011・3012・3021遺構図（1:40）

④石敷土坑　ＳＫ3020（第17図、写真図版８）

２区北側で検出した不整楕円形のもので、ＳＫ3018により削平される。規模は2.6×2.2m、深さ62㎝である。埋土の第１層では、偏平な石材２点が重なった状態で出土した。これらには加工痕は確認されない。土坑底部の埋土となる第５層には、15㎝程の大礫が土坑中央にかけ敷かれた状況が確認できた。出土遺物には16世紀前半の土師器皿（61）がある。

⑤その他

性格不明遺構　ＳＺ3010（第18図、写真図版６・８）

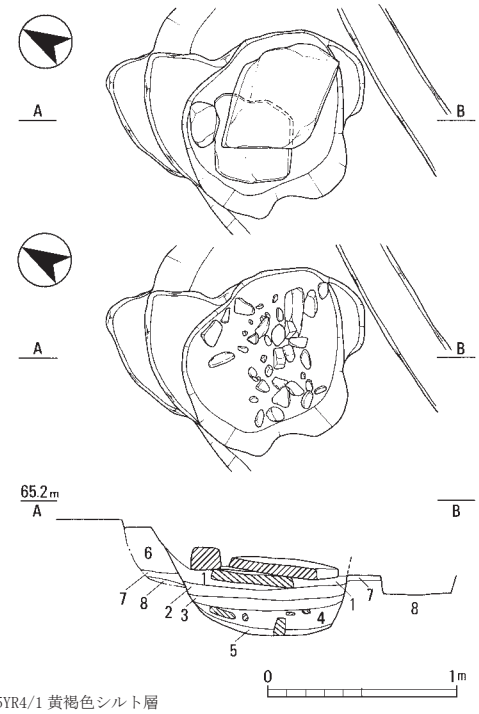
１区の南側で検出した円形の土坑状遺構で規模は3.0×2.6m、深さ78㎝を測る。埋土の第３・４層には、炭片を含まない焼土が多量に含まれる。出土遺物は見られず、時期は不明である。

落ち込み状遺構

１区でＡ18・19、Ｂ17～19にかけて検出した遺構であるが、調査時の誤認により重機で削平したため、形態は不明である。複数の遺構が存在したことも考えられる。Ⅳ層上面で人力による検出を行った際にＡ18～Ｂ17・18の範囲でまとまって遺物が出土した。土師器皿・茶釜蓋、常滑産甕・壺、青磁椀（63～70）がある。

註

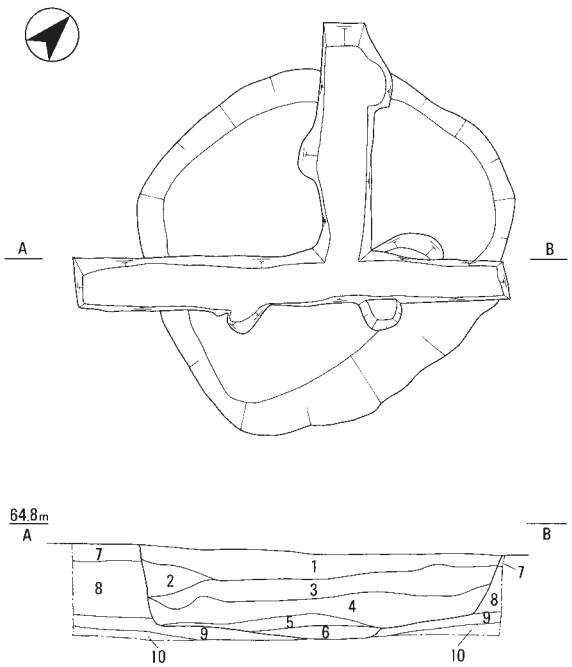
（１）伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古２、三重県、2008年



ＳＫ3020

1．2.5YR4/1 黄褐色シルト層
2．2.5YR3/1 黒褐色シルト層（2.5Y7/3 浅黄色シルトブロック５％含む）
3．10YR2/1 黒色シルト層
（2.5Y8/4 淡黄色シルトブロック５％含む、50㎜の中礫を多く含む）
4．2.5Y6/4 にぶい黄色シルト層（30～150㎜の中・大礫を多く含む）
5．2.5Y8/4 淡黄色粗砂～細礫層（150㎜の大礫を多く含む）
6．5Y2/1 黒色シルト層（黒ボク土中位）
7．5Y2/1 黒色シルト層（5Y7/2 灰白色シルトブロック５％、５㎜の中礫５％含む、黒ボク土下位）
8．2.5Y5/2 暗灰黄色シルト層（2.5Y7/3 浅黄色シルトブロック 25%含む）

第17図　ＳＫ3020遺構図（1:40）



ＳＺ3010

1．2.5Y3/1 黒褐色シルト層
2．2.5Y4/1 黄灰色シルト層
3．7.5YR5/2 灰褐色シルト層（7.5YR7/6 橙色シルトブロック 25%含む）
4．7.5YR7/6 橙色シルト層（焼土層）
5．5Y2/1 黒色シルト層
6．5Y6/2 灰オリーブ色粘土層
7．5Y2/1 黒色シルト層（黒ボク土中位）
8．5Y2/1 黒色シルト層（5Y7/2 灰白色シルトブロック５％、５㎜の中礫５％含む、黒ボク土下位）
9．2.5Y5/2 暗灰黄色シルト層（2.5Y7/3 浅黄色シルトブロック 25%含む）
10．2.5Y6/4 にぶい黄色粘土層（地山）

第18図　ＳＺ3010遺構図（1:60）

第２表　遺構一覧表

井戸・土坑・性格不明遺構

遺構名	地区	グリッド	性格	時期	形状	規模(m)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考
ＳＫ3001	1	Ｂ18	土坑	中世Ⅲ	楕円形	1.5×1.1	29	土師器皿・鍋、陶器甕	
ＳＫ3002	1	Ｃ17	土坑	中世Ⅳ	円形	1.9×1.8	15	土師器鍋	
3003	欠番								
ＳＥ3004	1	Ａ18	井戸	中世Ⅳ	円形	5.0×4.5	288	土師器皿・鍋・羽釜、山茶椀、常滑産甕、渥美産甕、古瀬戸口広有耳壺	石組井戸
3005	欠番								
ＳＫ3006	1	Ｃ17・18	土坑	中世Ⅳ	不明	3.5×2.0以上	16	土師器鍋	
ＳＫ3007	1	Ｄ16	土坑	中世Ⅳ	不整形	1.9×1.3	20	土師器皿・鍋	
ＳＫ3008	1	Ｃ15・16、Ｄ15・16	土坑	中世Ⅲ	不明	2.4×0.7以上	32	土師器皿・鍋、古瀬戸椀	
ＳＥ3009	1	Ｇ14・15、Ｈ14・15	井戸	中世Ⅲ	楕円形	1.7×1.4	(214)	土師器皿、山茶椀、灰釉陶器壺、青磁	
ＳＺ3010	1	Ｆ14	性格不明	不明	円形	3.0×2.6	78	なし	焼土を大量に含む
ＳＫ3011	1	Ａ18	土坑	中世Ⅲ	不明	3.0×0.7以上	40	土師器皿・鍋・羽釜、青磁	土師器鍋が多い
ＳＫ3012	1	Ｂ17	土坑	中世Ⅱ	不明	2.0×0.7以上	50	土師器皿、青磁	
ＳＫ3013	1	Ｃ16	土坑	中世Ⅳ	円形か	1.3×0.6以上	58	土師器鍋	
ＳＫ3014	2	Ｈ11、Ｉ11	土坑	中世Ⅲ～Ⅳ	不整形	1.8×1.0	31	土師器鍋か	
ＳＥ3015	2	Ｈ11・12	井戸	中世Ⅳ	円形か	1.4以上	(100)	土師器鍋	石組井戸
ＳＫ3016	2	Ｋ11	土坑	中世Ⅲ～Ⅳ	円形	0.8×0.8	31	土師器鍋か	
ＳＫ3017	2	Ｋ10	土坑	中世Ⅳ	楕円形	0.8×0.6	31	土師器鍋	
ＳＫ3018	2	Ｋ9・10、Ｌ９・10	土坑	中世Ⅳ	不整長方形	8.3×3.7	36	土師器皿・鍋	
ＳＫ3019	2	Ｋ10	土坑	中世Ⅲ～Ⅳ	楕円形	1.0×0.8	33	土師器鍋か	
ＳＫ3020	2	Ｌ10・11、Ｎ10・11	石敷土坑	中世Ⅳ	不整楕円形	2.6×2.2	62	土師器皿	
ＳＫ3021	2	Ｌ７・８、Ｍ７・８	土坑	中世Ⅱ	楕円形	2.0×1.8以上	42	土師器鍋、山茶椀	
ＳＫ3022	2	Ｎ６	土坑	不明	円形か	1.5×0.9以上	33	なし	
ＳＫ3023	2	Ｎ６、Ｏ６	風倒木	不明	不整形	4.1以上×3.5	26	なし	
ＳＫ3024	2	Ｎ６	土坑	不明	円形か	1.6×1.3	71	なし	
ＳＫ3025	2	Ｐ６	土坑	中世Ⅲ	楕円形か	0.8×0.6以上	13	山茶椀	
ＳＫ3031	2	Ｊ10	土坑	中世Ⅳ	円形	1.1×0.9	20	土師器皿、陶器	
ＳＫ3032	2	Ｋ９	土坑	中世Ⅲ～Ⅳ	楕円形か	1.2×1.1以上	25	土師器鍋か	

掘立柱建物・柱列

遺構名	地区	グリッド	性格	時期	主軸方位	桁行×梁行(間)	桁行(m)	梁行(m)	主な出土遺物	備考
ＳＢ3028	1	Ｂ16、Ｃ15～17、Ｄ16・17	掘立柱建物	中世Ⅳ	N26°Ｗ	3×2以上	5.1以上	4.5	泥塔、土師器皿・鍋	南北棟、側柱か
ＳＢ3029	2	Ｉ10・11、Ｊ10・11、Ｋ11・12	掘立柱建物	中世Ⅳ	N22°Ｗ	3×2	5.7	3.6	土師器鍋	南北棟、総柱
ＳＢ3030	3	Ｑ３、Ｒ２・３	掘立柱建物	中世Ⅳ	N57°Ｅ	3×1以上	6.3	1.8以上	土師器皿	東西棟、側柱か
ＳＡ3026	1	Ｃ16・17、Ｄ16	柱列	中世Ⅳ	N64°Ｅ	3	5.6	－	土師器皿、陶器	
ＳＡ3027	1	Ｃ17、Ｄ16	柱列	中世Ⅳ	N64°Ｅ	3	6.3	－	土師器小片	
ＳＡ3033	1	Ｃ15・16、Ｄ15	柱列	中世Ⅳか	N46°Ｅ	3	6.1	－		
ＳＡ3034	1	Ｂ16・17、Ｃ16	柱列	中世Ⅳか	N46°Ｅ	3	5.1	－		

※主軸方位は座標北を基準とし、東西偏角90°以内で表示。棟方向が不明なものは、南北方向を主軸とした。規模は柱心芯間で示す。

Ⅳ　遺　物

（１）遺物の概要

本次調査で出土した遺物は土器、陶磁器、土製品、石製品で総量はコンテナ換算で15箱、総重量は26.15kgである。遺物の時期は室町時代のものが中心で、特に南伊勢系土師器が数多く見られた。以下に遺構種別ごとに報告する。

（２）掘立柱建物・Pit出土遺物（第19～21図）

１～４はＳＢ3028出土遺物である。１はC16 Pit５出土の泥塔で、偏平泥塔に分類される[1]。上端部の一部が欠損するがほぼ完形で、残存状況は良好である。長さ8.8cm、幅3.5cm、最大厚2.0cm、底部中央の楕円形の孔は長幅４㎜、短幅３㎜、深さ2.3cmである。

型により成形した後に工具を用いて全体を調整し、焼成したものと考えられる。泥塔上部の欠損部では粘土の継ぎ目が観察でき、厚さ２㎜程の単位で粘土の重なりが見られる。外型に複数回に分けて粘土を充填して成形したものと考えられる。

正面には宝塔、梵字、仏が見られ、これらの図像を立体的に表現している。宝塔の細部には水煙、宝珠、相輪、宝鎖、露盤、笠、首、風鐸、軸、基壇が見られる（第20図）。宝塔の構図では、宝珠、相輪、露盤、笠、首、軸、基壇の凹凸がより強調されている。一方で水煙、宝鎖、風鐸は浅い凹凸で表現する差異が見られる。

軸には仏と二重光背、蓮座が確認できる。仏の頭上には孔があり梵字「ア」と読める。全体の構図、梵字から仏は多宝如来座像で、法衣の内側に禅定印を結んでいるものと考えられる[2]。

側面・背面・底部は、工具ナデにより器面が平滑に調整されており、側面と背面には斜方向に工具の擦痕が見られる。また、底部孔は焼成前に穿孔されており、孔内部には串を引き抜いた際の擦痕が観察できる。串の抜き取り後に、孔の縁を工具で整えている。

野添大辻遺跡と同型品と考えられる泥塔が三重県内では亀山市正法寺山荘跡、伊勢市等観寺などで確認できる。これらの偏平泥塔との比較、検討について第Ⅵ章で述べることとする。

２～４はＳＢ3028（D16 Pit２・４）出土の南伊勢系土師器で、皿（２・３）は口径12～13cmである。鍋（４）は小型鍋Ａである。これらは南伊勢中世（以下、「中世」とする）Ⅳa～b期[3]のものである。遺構の時期は15世紀後半～16世紀前半と見られる。泥塔の年代についても、同時期のものと考えられる。

５・６はＳＢ3029（Ｊ11 Pit２）出土遺物で、南伊勢系土師器である。皿（５）は口径７cm以下である。鍋（６）は口縁部小片で口径は不明。いずれも中世Ⅳb期のものであろう。遺構の時期は16世紀前半と見られる。

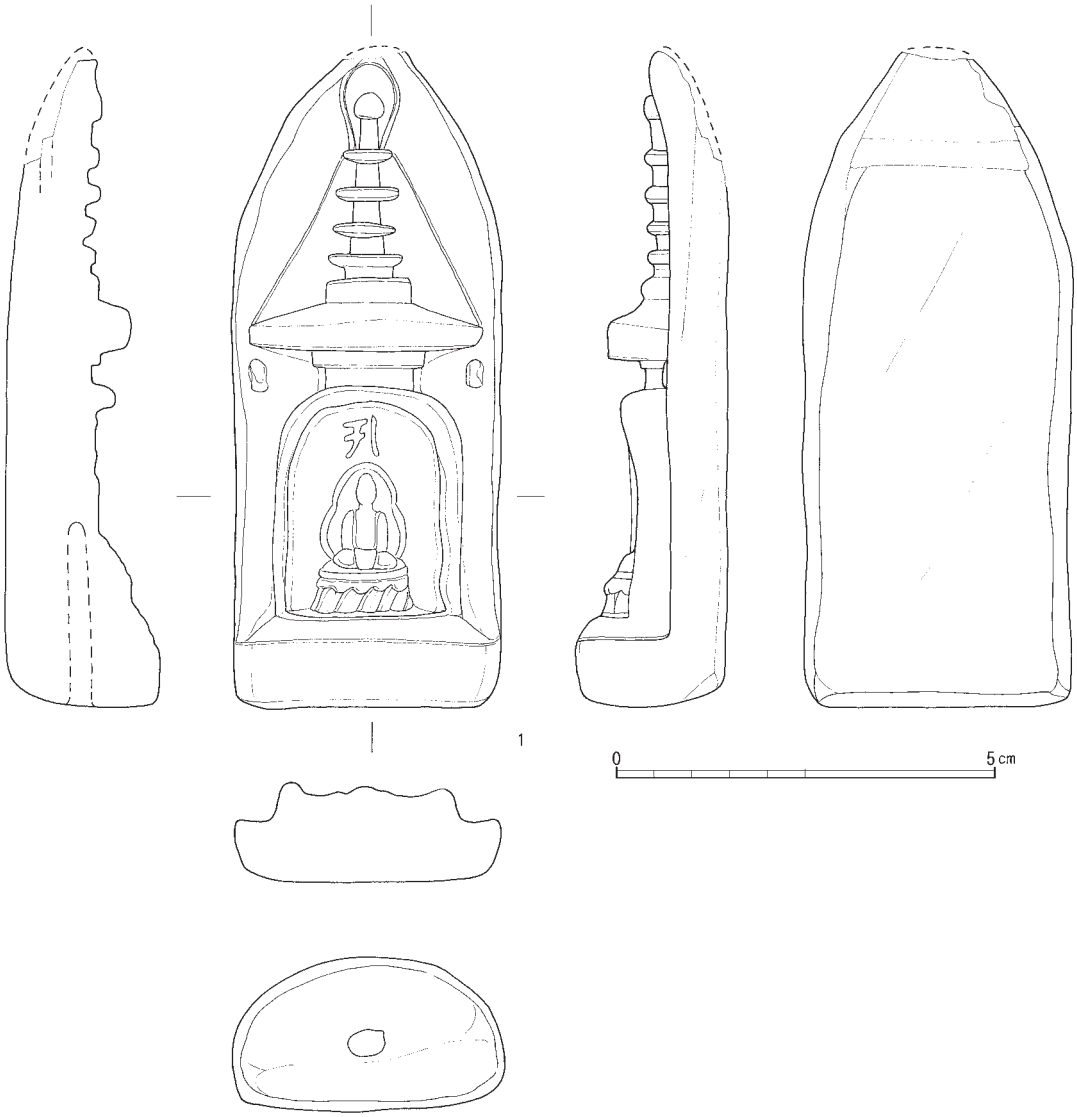
７～10はPit出土遺物である。７・８はC17 Pit８から出土したもの南伊勢系土師器である。皿（７）は口径11cm以下、鍋（８）は口縁部小片である。いずれも中世Ⅳb期のものであろう。

９はK10 Pit１から出土した南伊勢系土師器の鍋である。口縁部小片であるが、中世Ⅳ期のものであろう。10はＱ３ Pit１から出土した瀬戸・美濃産陶器の丸椀である。鉄釉が内面全体と外面口縁部から体部にかけて施され、高台は露胎となる。登窯第５小期であろう[4]。

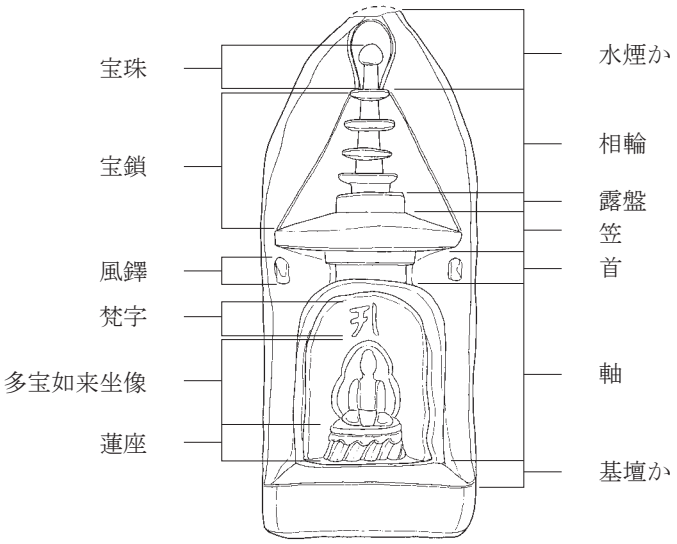
（３）井戸出土遺物（第21図）

ＳＥ3004出土遺物（11～21）　11～19は南伊勢系土師器である。鍋は小型の鍋Ａ（11～13）と中型の鍋Ｂ（14～18）がある。皿（19）は口径11cm以下である。いずれも中世Ⅳb期のものである。21は古瀬戸の口広有耳壺で、後Ⅳ期のものであろう。残存する耳部は１箇所であるが、４箇所に及ぶものと考えられる。外面全体に鉄釉が施され、底部は露胎となる。なお、口縁～肩部片はC17 Pit８で出土したもので、ＳＥ3004出土の体部片と接合できた。20は山茶椀で、渥美型５型式のもので、混入品と考えられる[5]。遺構の時期は16世紀前半と考えられる。

ＳＥ3009出土遺物（22～25）　22は南伊勢系土師器皿である。口縁13cm以下で中世Ⅲa期であろう。23は山茶椀で、渥美型５型式である。24は青磁椀である。施釉は内面全体と外面体部にされ、高台は露胎である。高台は削出である。内面底部には陰刻草花文が見られる。25は灰釉陶器の広口壺である。頸基部には１周する突帯が施される。尾張型３～４型式と見られることから、混入品と考えられる。以上から遺構の時期は14世紀後半と考えられる。



第19図　遺物実測図１（1:1）



第20図　泥塔各部名称図

ＳＥ3015出土遺物（26～33）　26～33は南伊勢系土師器の鍋である。26～28が小型の鍋Ａ、29が鍋Ｃ、30～33が中型の鍋Ｂである。いずれも中世Ⅳｂ期のものである。遺構の時期は16世紀前半と考えられる。

（４）土坑出土遺物（第22図）

ＳＫ3001出土遺物（34・35）　34・35は南伊勢系土師器である。皿（34）は口径12㎝である。鍋（35）は口縁部片。いずれも中世Ⅲ期と考えられる。遺構の時期は14世紀後半～15世紀前半と見られる。

ＳＫ3006出土遺物（36～38）　南伊勢系土師器の鍋であり、中世Ⅳａ期のものである。遺構の時期は15世紀後半と考えられる。

ＳＫ3007出土遺物（39）　南伊勢系土師器皿で、口径は９㎝であることから、中世Ⅳａ期のものと見られる。遺構の時期は15世紀後半と考えられる。

ＳＫ3008出土遺物（40～44）　40～43は南伊勢系土師器皿である。40・41は口径７～８㎝、42・43は口径10㎝程である。中世Ⅲｂ期のものである。44は古瀬戸椀であり、後Ⅲ期であろう。鉄釉が内面全体と外面体部にかけて施釉され、高台は露胎となる。遺構の時期は、15世紀前半と考えられる。

ＳＫ3011出土遺物（45～59）　45～57は南伊勢系土師器である。皿（45～48）は口径６～８㎝、皿（49～56）は口径10～13㎝程である。鍋（57）は中型の鍋Ｂである。これらは中世Ⅲａ～ｂ期のものであろう。59はチャート製の石核で混入品である。遺構の時期は14世紀後半～15世紀前半と考えられる。

ＳＫ3012出土遺物（60）　青磁椀で、外内面に施釉され、外面には鎬蓮弁文が見られる。13世紀後半～14世紀前半のものか。

ＳＫ3020出土遺物（61）　南伊勢系土師器の皿で、口径は6.6㎝であることから中世Ⅳｂ期と見られる。遺構の時期は16世紀前半と考えられる。

ＳＫ3021出土遺物（62）　山茶椀で、尾張型６型式のものと見られる。

（５）落ち込み状遺構出土遺物（第22図）

１区Ａ18～Ｂ17・18の範囲でまとまって出土したものを報告する。63～66は南伊勢系土師器である。皿は63・64が中世Ⅳｂ期、65が中世Ⅲｂ期のものであろう。65は茶釜の蓋である。平面形は円形を呈すると見られ、中央には偏平な把手が付く。把手はユビオサエにより成形し、貼り付けたものである。

67は青磁椀で、外内面に施釉される。外面には鎬蓮弁文が見られる。13世紀後半～14世紀前半のものか。

68～70は常滑産陶器である。68は壺の体部片と見られる。ヘラ状工具による線刻があるものの、読み取ることができない。２つ以上の文字または記号が記されていると見られる。69・70は甕である。69は６型式期、70は９～10型式期と見られる[6]。

（６）包含層・表土出土遺物（第22図）

71～76は南伊勢系土師器である。鍋は71・72が中世Ⅳｂ期、73が中世Ⅲａ期と考えられる。74・75は羽釜である。76は茶釜と考えられる。77は青磁椀で、外内面に施釉され、外面には鎬蓮弁文が見られる。13世紀後半～14世紀前半のものか。78は陶器椀で、外面は露胎で、体部から高台までロクロケズリである。内面には黄釉が施される。79は山茶椀で、尾張型６型式と見られる。

註

（１）泥塔の分類は、畑　大介氏の研究成果に基づき報告する。なお、泥塔の分類について伊藤久嗣氏の研究では野添大辻遺跡と同型の泥塔を「舟形光背偏平宝塔型泥塔」と呼称している。これらの分類については第Ⅵ章で検討する。
畑　大介「偏平形泥塔について」『山梨県考古学論文集』Ⅱ、山梨県考古学協会10周年記念論文集編集委員会、1989年
伊藤久嗣「「泥塔」小考」『斎宮歴史博物館研究紀要』二、斎宮歴史博物館、1993年

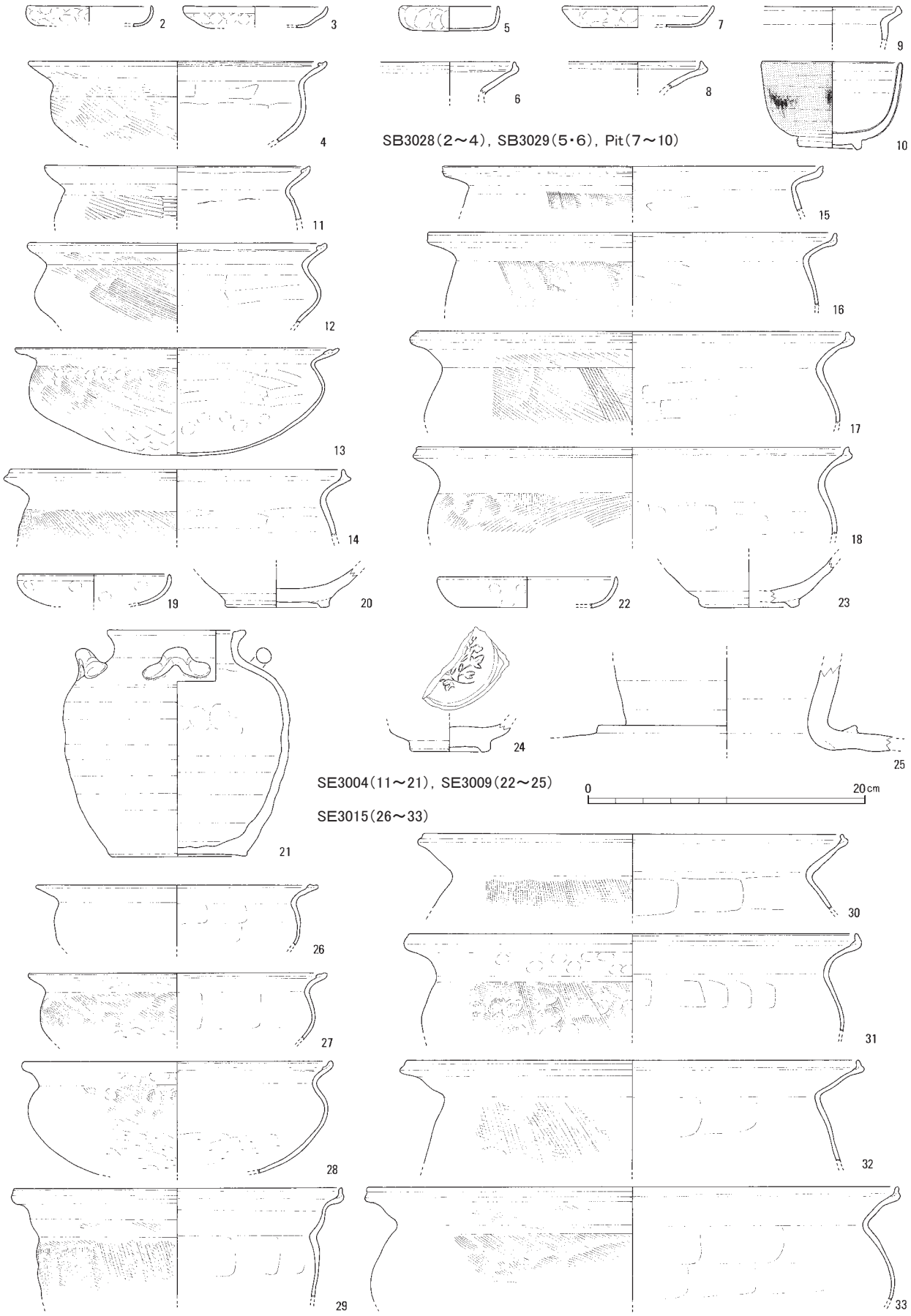
（２）泥塔の構図については、伊藤裕偉氏、狭川真一氏両名よりご教示いただいた。

（３）南伊勢系土師器の編年は下記の研究に基づく。
伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古２、三重県、2008年

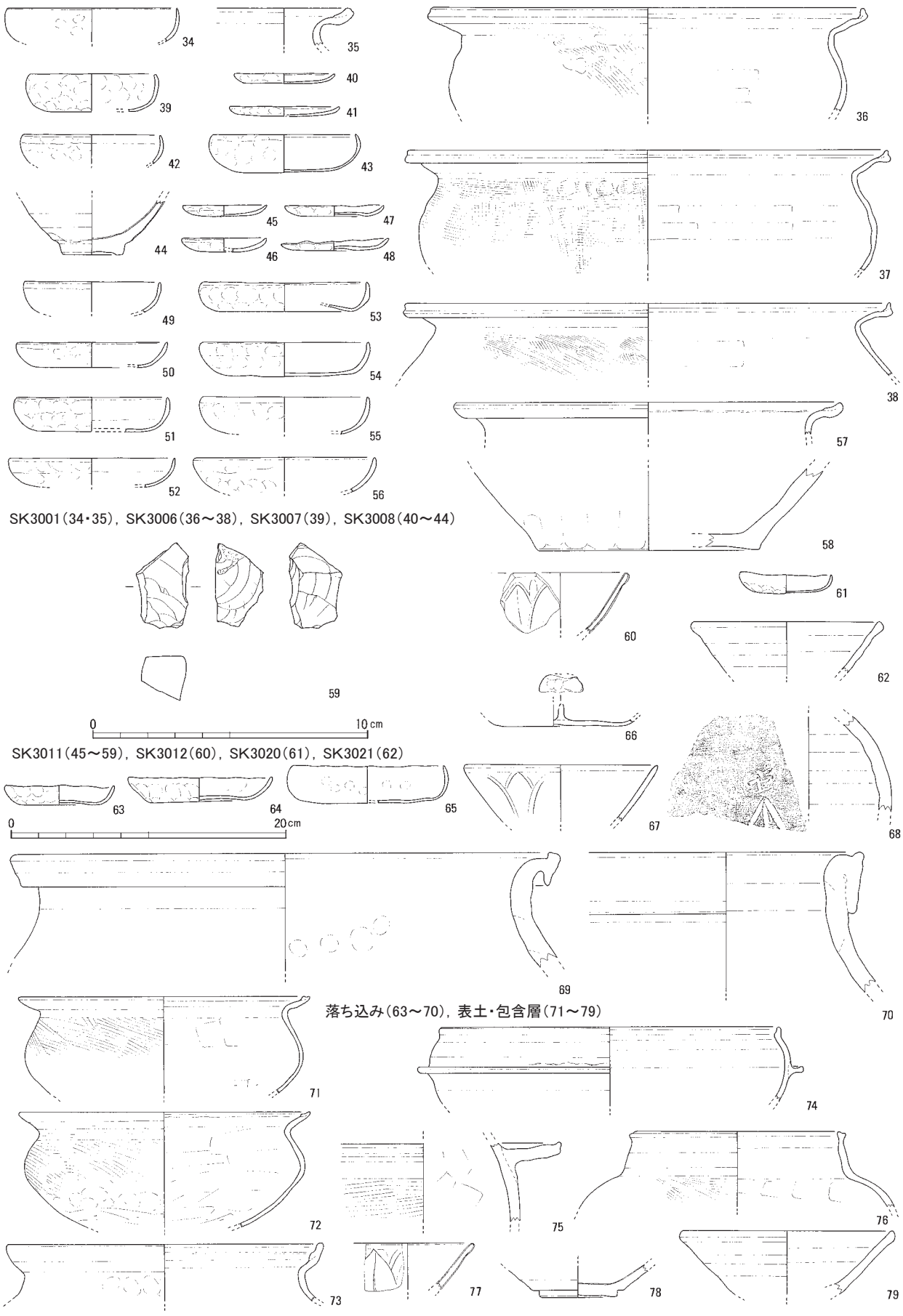
（４）瀬戸美濃産陶器の編年は下記の研究に基づく。
藤澤良祐『愛知県史別編　窯業』２、愛知県、2007年

（５）灰釉陶器、山茶椀の編年は下記の研究に基づく。
藤澤良祐「山茶碗の型式編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ、瀬戸市歴史民俗資料館、1982年
藤澤良祐『愛知県史別編　窯業』２、愛知県、2007年

（６）常滑産陶器の編年は下記の研究に基づく。
中野晴久『愛知県史別編　窯業』３、愛知県、2012年



第21図　遺物実測図２（1:4）



第22図　遺物実測図３（1:4、59は1:2）

第３表　遺物観察表

土製品

NO	実測番号	種　類	器種	地区	グリッド	遺構・層位	計測値（cm）				重量(g)	残存度	器面調整	胎　土	焼成	色　調	備　考
							長さ	幅	厚さ	穿孔幅							
1	1-1	土製品	泥塔	1	C16	Pit5	8.7	3.5	2.0	0.5	50.7	完形	工具ﾅﾃﾞ	密	良	にぶい黄褐 10YR7/3	偏平舟形光背宝塔型泥塔 焼成は土師質

土器・陶磁器　1

NO	実測番号	種　類（産地）	器種	地区	グリッド	遺構・層位	計測値（cm）			部位・残存度	器面調整	胎　土	焼成	色　調	備　考
							口径	底径	器高						
2	14-3	土師器	皿	1	D16	Pit2	9.0		1.5	3/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ (内) ﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/4	
3	14-5	土師器	皿	1	D16	Pit4	10.4		1.5	3/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	
4	14-4	土師器	鍋	1	D16	Pit4	21.5			2/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/4	外面煤付着
5	14-6	土師器	皿	2	J11	Pit2	6.8		1.8	4/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ (内) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ	密		にぶい橙7.5YR7/4	
6	14-7	土師器	鍋	2	J11	Pit2				口縁部 小片	(外) ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR6/3	外面煤付着
7	14-1	土師器	皿	1	C17	Pit8	10.8		1.5	4/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		浅黄橙10YR8/3	
8	14-2	土師器	鍋	1	C17	Pit8				口縁部 小片	(外) ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR6/3	外面煤付着
9	14-8	土師器	鍋	2	K10	Pit1				口縁部 小片	(外) ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	
10	14-9	陶器 （瀬戸・美濃）	丸椀	3	Q3	Pit1	10.0	4.4	6.3	7/12	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密		素地：黄灰10YR7/1 鉄釉：褐7.5YR4/3	削出高台 底部は露胎
11	3-3	土師器	鍋	1	A18	SE3004	19.0			2/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄褐10YR7/4	
12	4-3	土師器	鍋	1	A18	SE3004	21.4			口縁部 3/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR6/3	外面煤付着
13	3-1	土師器	鍋	1	A18	SE3004	23.2		7.8	口縁部 4/12	(外) ｹｽﾞﾘ, ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾕﾋﾞｵｻｴ, 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		灰黄褐10YR4/2	外面煤付着
14	2-2	土師器	鍋	1	A18	SE3004	24.0			4/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		灰褐7.5YR4/2	外面煤付着
15	4-4	土師器	鍋	1	A18	SE3004	27.4			口縁部 2/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR5/3	外面煤付着
16	4-2	土師器	鍋	1	A18	SE3004	29.2			口縁部 2/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		褐灰10YR4/1	
17	4-1	土師器	鍋	1	A18	SE3004	31.0			口縁部 4/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		褐灰10YR4/1	外面煤付着
18	2-1	土師器	鍋	1	A18	SE3004	31.0			3/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		灰黄褐10YR5/2	外面煤付着
19	3-2	土師器	皿	1	A18	SE3004	10.8			2/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ (内) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ	密		灰白10YR8/2	
20	3-4	山茶椀	椀	1	A18	SE3004		7.6		底部 6/12	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 貼付ﾅﾃﾞ, 糸切痕 (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	貼付高台
21	1-2	陶器 （古瀬戸）	口広 有耳壺	1	A18 C17	SE3004 Pit8	10.0	9.9	16.4	底部 10/12	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 糸切痕, 施釉 (内) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 施釉	密	良	素地：黄灰2.5Y7/2 釉：にぶい黄褐10YR4/3	底部 SE3004 口縁部 C17Pit8
22	8-3	土師器	皿	1	G14・15	SE3009	12.8		2.2	口縁部 2/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		灰白10YR8/2	
23	8-2	山茶椀	椀	1	G14・15	SE3009		7.2		底部 4/12	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 貼付ﾅﾃﾞ, 糸切痕 (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	黄灰2.5Y6/1	貼付高台
24	8-6	青磁	椀	1	H14・15	SE3009		5.8		底部 6/12	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 施釉 (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 印刻草花文, 施釉	密	良	素地：灰白5Y7/1 釉：明オリーブ10GY5/2	削出高台, 高台内面露胎
25	8-1	灰釉陶器	長頸壺	1	H14・15	SE3009				頸部 3/12	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 灰釉 (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 灰釉	密	良	素地：灰白5Y8/1 釉：明オリーブ2.5GY7/1	
26	5-4	土師器	鍋	2	H11	SE3015	20.2			口縁部 2/12	(外) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/4	外面煤付着
27	5-2	土師器	鍋	2	H11	SE3015	21.2			口縁部 3/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ｹｽﾞﾘ, 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		橙7.5YR7/6	外面煤付着
28	5-1	土師器	鍋	2	H11	SE3015	22.2			口縁部 7/12	(外) ｹｽﾞﾘ, ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ｹｽﾞﾘ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR5/3	外面煤付着
29	6-2	土師器	鍋	2	H11	SE3015	23.5			口縁部 3/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/4	外面煤付着
30	5-3	土師器	鍋	2	H11	SE3015	30.2			口縁部 1/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙7.5YR7/3	外内面煤付着
31	6-1	土師器	鍋	2	H11	SE3015	32.1			口縁部 1 /12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		明黄褐2.5Y7/6	
32	6-4	土師器	鍋	2	H11	SE3015	33.6			口縁部 小片	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	外面煤付着
33	6-3	土師器	鍋	2	H11	SE3015	38.6			口縁部 1/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	外面煤付着
34	8-4	土師器	皿	1	B18	SK3001	12.3			口縁部 2/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		灰白10YR8/2	
35	8-5	土師器	鍋	1	B18	SK3001				口縁部 小片	(外) ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	
36	7-2	土師器	鍋	1	C17	SK3006	31.2			口縁部 2/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR6/4	外面煤付着
37	7-1	土師器	鍋	1	C17	SK3006	34.8			口縁部 3/12	(外) ﾊｹ, ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/4	
38	7-3	土師器	鍋	1	C17	SK3006	35.8			口縁部 2/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		浅黄橙10YR8/4	外面煤付着
39	12-1	土師器	皿	1	D17	SK3007	9.0		2.7	7/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ (内) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	
40	9-4	土師器	皿	1	C15・16	SK3008	7.4	1.2		6/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ	やや密		灰黄褐10YR5/2	

土器・陶磁器　2

NO	実測番号	種　類（産地）	器　種	地区	グリッド	遺構・層位	計測値（cm）			部位・残存度	器面調整	胎　土	焼成	色　調	備　考
							口径	底径	器高						
41	9-3	土師器	皿	1	C15・16	SK3008	8.0	0.7		3/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ	やや密		橙5YR6/6	
42	9-5	土師器	皿	1	C15・16	SK3008	10.2			3/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		灰白2.5Y8/2	
43	9-2	土師器	皿	1	C15	SK3008	10.7	2.8		完形	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密		浅黄橙10YR8/3	
44	9-1	陶器（古瀬戸）	天目茶椀	1	C15・16	SK3008		4.6		底部 11/12	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ, 鉄釉, 錆釉 (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 鉄釉	密	良	素地：黄灰2.5Y6/1 鉄釉：黒10YR2/1 錆釉：暗赤灰10R4/1	削出高台
45	10-3	土師器	皿	1	A18	SK3011	6.2		0.9	1/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		浅黄橙10YR8/3	
46	10-5	土師器	皿	1	A18	SK3011	6.2		1.0	4/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	
47	10-6	土師器	皿	1	A18	SK3011	7.2		0.8	3/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ	密		灰白2.5Y8/2	
48	10-2	土師器	皿	1	A18	SK3011	7.9		0.7	11/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ	密		浅黄橙10YR8/3	
49	10-7	土師器	皿	1	A18	SK3011	10.0			2/12	(外) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		灰白10YR8/2	
50	10-1	土師器	皿	1	A18	SK3011	11.0		1.8	2/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密		浅黄橙10YR8/3	
51	9-6	土師器	皿	1	A18	SK3011	11.4	2.5		4/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		灰白2.5Y8/2	
52	9-8	土師器	皿	1	A18	SK3011	12.2			2/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		浅黄橙10YR8/3	
53	9-7	土師器	皿	1	A18	SK3011	12.3	2.1		2/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	
54	11-3	土師器	皿	1	A18	SK3011	12.4		2.5	7/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		浅黄橙10YR8/3	
55	10-8	土師器	皿	1	A18	SK3011	12.4			3/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		灰白10YR8/2	
56	10-4	土師器	皿	1	A18	SK3011	13.2			2/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		灰黄2.5Y7/2	
57	11-1	土師器	鍋	1	A18	SK3011	28.2			口縁部 2/12	(外) ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密		にぶい橙7.5YR7/3	外面煤付着
58	11-2	陶器（常滑）	甕	1	A18	SK3011		16.2		底部 3/12	(外) ﾅﾃﾞ, 工具ﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	やや粗		灰褐7.5YR4/2	
60	12-4	青磁	椀	1	B17	SK3012				口縁部 小片	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 鎬蓮弁文, 施釉 (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 施釉	密	良	素地：黄褐10YR5/2 釉：オリーブ灰2.5GY6/1	
61	12-2	土師器	皿	2	L10・11 M10・11	SK3020	6.6		1.5	6/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ (内) ﾕﾋﾞｵｻｴ	密		にぶい黄橙10YR7/3	
62	12-3	山茶椀	椀	2	M7・8	SK3021	13.4			口縁部 2/12	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白2.5Y7/1	
63	13-6	土師器	皿	1	B18	落込み	7.8		1.4	3/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ (内) ﾅﾃﾞ	密		橙7.5YR7/6	
64	13-7	土師器	皿	1	B17	落込み	10.4		1.9	5/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	
65	13-4	土師器	皿	1	B18	落込み	11.0		2.8	5/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ (内) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ	密		灰白10YR8/2	
66	13-5	土師器	蓋	1	B17	落込み				体部 小片	(外) ﾅﾃﾞ, 貼付ﾅﾃﾞ, ﾕﾋﾞｵｻｴ (内) ﾅﾃﾞ	密		にぶい橙7.5YR7/4	底部煤付着
67	12-5	青磁	椀	1	B18	落込み	13.9			口縁部 2/12	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 鎬蓮弁文, 施釉 (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 施釉	密	良	素地：灰5Y5/1 釉：オリーブ灰2.5GY6/1	
68	13-3	陶器（常滑）	壺	1	A18	落込み				体部 小片	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 線刻 (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	暗赤褐5YR3/3	
69	13-1	陶器（常滑）	甕	1	A18	落込み	38.6			口縁部 小片	(外) ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	灰褐5YR4/2	
70	13-2	陶器（常滑）	甕	1	A18	落込み				口縁部 小片	(外) ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	灰5Y6/1	
71	15-4	土師器	鍋	2	K10	包含層	20.8			口縁部 2/12	(外) ｹｽﾞﾘ?, ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ｹｽﾞﾘ, 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		浅黄橙10YR8/4	外面煤付着
72	16-4	土師器	鍋	2		表土	21.0			口縁部 3/12	(外) ｹｽﾞﾘ, ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ｹｽﾞﾘ, 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	外面煤付着
73	15-1	土師器	鍋	1	A18	包含層	22.9			1/12	(外) ﾕﾋﾞｵｻｴ, ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	外面煤付着
74	15-5	土師器	羽釜	3	S3	包含層	24.6			口縁部 1/12	(外) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい黄橙10YR7/3	外面煤付着
75	15-2	土師器	羽釜	1	E15	包含層				体部 小片	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ｺﾅﾃﾞ	密		灰白10YR8/2	
76	16-1	土師器	茶釜	1		表土	14.8			口縁部 1/12	(外) ﾊｹ, ﾖｺﾅﾃﾞ (内) 工具ﾅﾃﾞ, ﾖｺﾅﾃﾞ	密		にぶい橙7.5YR7/4	外面煤付着
77	16-3	青磁	椀	1		表土				口縁部 小片	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 鎬蓮弁文, 施釉 (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 施釉	密	良	素地：灰白5Y7/1 釉：オリーブ灰5GY6/1	
78	15-3	陶器	椀	2	K10	包含層		4.6		底部 6/12	(外) ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ, 黄釉 (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ, 黄釉	密	良	素地：灰白2.5Y8/2 黄釉：にぶい黄2.5Y6/4	
79	16-2	山茶椀	椀	1		表土	15.2			口縁部 2/12	(外) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ (内) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白N8/0	

石器

NO	実測番号	器　種	地区	グリッド	遺構・層位	計測値（cm）			重量（g）	石材	備　考
						長	幅	厚さ			
59	11-4	石核	1	A18	SK3011	2.1	1.9	1.7	11.4	ﾁｬｰﾄ	

Ⅴ　自然科学分析

1　分析の内容と結果

（1）分析の対象と方法

第１次調査で確認された縄文早期遺構に関する年代・古環境のデータを収集し、野添大辻遺跡における中世遺構面の黒ボク土の形成過程に関する資料を得ることを目的とする。

調査では黒ボク土が比較的厚く、良好な状態で遺存していた第３次調査１区下層においてテフラ分析、珪藻分析、プラント・オパール分析を実施し、完新世以降の植生や黒ボク土の成因にデータを得た。試料の採取は、黒ボク土とその下層を対象とした（第８図）。なお、『第２次報告』においても土壌分析を実施しており、本報告ではこれと対応した層で分析試料を得ている。

（2）分析結果の概要

テフラ分析では第２調査と同様に黒ボク土層から鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）起源の火山ガラスと同定された。

分析の結果、段丘上の環境に差異があることが推察された。第２次調査区の資料採取地は埋没した窪地や谷地形であることから、珪藻分析ではやや湿潤な陸域環境が示され、第３次調査区では比較的乾いた環境であったと推定された。プラント・オパール分析では第２次調査区ではヨシ属が生育できるような湿潤な場所が存在したが、第３次調査区ではウシクサ族が生育するような草原的な環境が広がると推定された。

2　テフラ分析

株式会社パレオ・ラボ　藤根　久

（1）はじめに

野添大辻遺跡（第３次調査）は、度会郡大紀町野添地内の宮川右岸の標高約65ｍの台地上に立地する縄文時代と中世の集落跡である。ここでは、野添大辻遺跡（第３次調査）の基本土層堆積物について、湿式篩分けを行い、重鉱物および軽鉱物組成、火山ガラスの屈折率測定を行い、テフラの同定を行った。なお、同一試料について、珪藻分析とプラント・オパール分析を行っている（各分析を参照）。

（2）試料と方法

分析試料は、野添大辻遺跡（第３次調査）で採取された堆積物５試料である（第４表）。

各テフラ試料は、以下の方法で処理した。

（1）自然乾燥状態で11g～13g程度を秤量した後、１φ（0.500mm）、２φ（0.250mm）、３φ（0.125mm）と４φ（0.063mm）の４枚の篩を重ね、湿式ふるい分けをした。（2）４φ篩残渣について、重液（テトラブロモエタン、比重2.96）を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。（3）軽鉱物は、簡易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。火山ガラスの形態は、町田・新井（2003）の分類基準に従い、バブル型平板状（b1）、バブル型Ｙ字状（b2）、軽石型繊維状（p1）、軽石型スポンジ状（p2）、急冷破砕型フレーク状（c1）、急冷破砕型塊状（c2）に分類した。（4）重鉱物は、封入剤カナダバルサムを用いてプレパラートを作製し、単斜輝石（Cpx）、斜方輝石（Opx）、角閃石（Ho）、ジルコン（Zi）、磁鉄鉱（Mag）を同定・計数した。（5）４φ篩残渣の火山ガラスは、横山ほか（1986）に従って温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率測定を行った。

（3）結果と考察

以下に、各試料の湿式篩分け結果、軽鉱物組成、重鉱物組成、火山ガラスの屈折率測定結果を示す。

［分析No.１（６層）］

堆積物は、2.5Y2/1黒色シルトである。湿式篩分けを行った結果、４φ篩残渣が最も多い（第５表）。

第４表　分析試料とその特徴

分析No.	地点	層位	時期	特徴	備考
1	１区	６層	上面が中世遺構検出面	黒色（2.5Y2/1）シルト（極粗砂含む）	テフラ分析、珪藻分析、プラント・オパール分析
2		７層	K-Ａｈ降灰層準	黒色（5Y2/1）シルト	
3		８層	－	黒色（5Y2/1）シルト（灰白色シルトブロック、中礫５％含む）	
4		９層	縄文時代早期	暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト	
5		10層	－	にぶい黄色（2.5Y6/4）粘土、粘性高い	

軽鉱物は、火山ガラスを比較的多く含み、軽鉱物全体に対して約28.9%である。火山ガラスは、バブル型平板状ガラス（b1）やバブル型Y字状ガラス（b2）が多い。軽石型スポンジ状ガラス（p2）や急冷破砕型塊状（c2）が含まれていた。なお、淡褐色ガラスが含まれていた。重鉱物では、磁鉄鉱（Mag）、角閃石（Ho）、斜方輝石（Opx）が多く、単斜輝石（Cpx）を含む（第６表、第23図）。なお、不明（Opq）には、炭化物片が多く含まれていた。

火山ガラスの屈折率測定では、範囲（range）が1.5067-1.5113の範囲を示し、平均値が1.5086であった（第24図）。これら火山ガラスは、鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）起源の火山ガラスと考えられる。

［分析No.２（７層）］

堆積物は、5Y2/1黒色シルトである。湿式篩分けを行った結果、１φ篩残渣が最も多い（第５表）。

軽鉱物は、長石類や不明粒子が多く、火山ガラスを11.8%含む。火山ガラスは、バブル型平板状ガラス（b1）やバブル型Y字状ガラス（b2）あるいは軽石型繊維状ガラス（p2）を含む。なお、淡褐色ガラスが含まれていた。重鉱物では、角閃石（Ho）や不明（Opq）あるいは磁鉄鉱（Mag）が多く、斜方輝石（Opx）や単斜輝石（Cpx）を含む（第６表、第23図）。なお、不明（Opq）には、片岩類などの岩石片が多く含まれていた。

火山ガラスの屈折率測定では、範囲（range）が1.5064-1.5107の範囲を示し、平均値が1.5085であった（第24図）。これら火山ガラスは、鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）起源の火山ガラスと考えられる。

［分析No.３（８層）］

堆積物は、5Y2/1黒色シルト土壌である。湿式篩分けを行った結果、１φ篩残渣が最も多い（第５表）。

軽鉱物は、長石類や不明粒子が多く、火山ガラスを3.2%含む。火山ガラスは、バブル型平板状ガラス（b1）やバブル型Y字状ガラス（b2）を僅かに含む。なお、淡褐色ガラスが含まれていた。重鉱物では、角閃石（Ho）が非常に多く、不明（Opq）も多く、磁鉄鉱（Mag）や斜方輝石（Opx）を含む（第６表、第23図）。なお、不明（Opq）には、片岩類などの岩石片が多く含まれていた。

火山ガラスの屈折率測定では、範囲（range）が1.5070-1.5109の範囲を示し、平均値が1.5088であった（第24図）。これら火山ガラスは、鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）起源の火山ガラスと考えられる。

［分析No.４（９層）］

堆積物は、2.5Y5/2暗灰黄色シルトである。湿式篩分けを行った結果、１φ篩残渣が最も多い（第５表）。

軽鉱物は、長石類や不明粒子が多く、石英（Qu）も多く、火山ガラスを僅かに含む。火山ガラスは、バブル型平板状ガラス（b1）やバブル型Y字状ガラス（b2）が僅かに含まれていた。重鉱物では、角閃石（Ho）が非常に多く、不明（Opq）や磁鉄鉱（Mag）を含む（第６表、第23図）。なお、不明（Opq）には、片岩類などの岩石片が多く含まれていた（第６表、第23図）。

［分析No.５（10層）］

堆積物は、2.5Y6/4にぶい黄色粘土である。湿式篩分けを行った結果、１φ篩残渣が最も多い（第５表）。

第５表　テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果

分析No.	処理湿潤重量（g）	砂粒分の粒度組成（重量g）					重液分離（g）	
		1φ	2φ	3φ	4φ	>4φ	軽鉱物	重鉱物
1	11.34	0.109	0.049	0.099	0.139	0.395	0.123	0.010
2	11.06	0.293	0.066	0.124	0.248	0.731	0.166	0.014
3	11.49	0.691	0.080	0.154	0.297	1.222	0.164	0.013
4	11.50	0.972	0.136	0.107	0.193	1.408	0.129	0.026
5	13.27	1.329	0.242	0.169	0.272	2.011	0.163	0.036

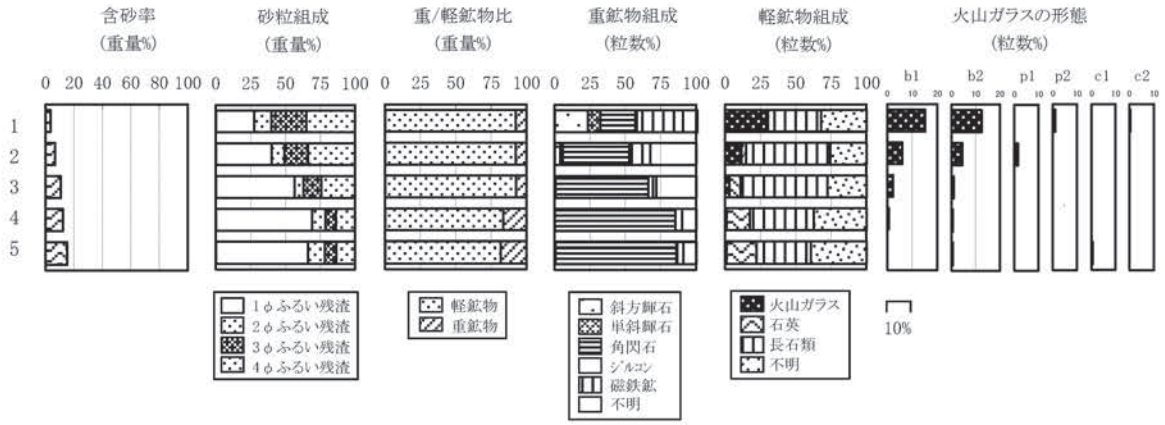
第６表　４φ篩残渣中の鉱物組成

分類群／分析No.	石英（Qu）	長石（Pl）	不明（Opq）	バブル（泡）型		軽石型		急冷破砕型		ガラス合計	軽鉱物の合計							重鉱物の合計
				平板状（b1）	Y字状（b2）	繊維状（p1）	スポンジ状（p2）	フレーク状（c1）	塊状（c2）			斜方輝石（Opx）	単斜輝石（Cpx）	角閃石（Ho）	ジルコン（Zi）	磁鉄鉱（Mg）	不明（Opq）	
1	3	82	70	33	27		2		1	63	218	50	19	53		70	22	214
2	6	122	52	12	9	3				24	204	8	4	97		31	67	207
3	17	135	61	5	2					7	220	1		140		12	60	213
4	34	94	77	1	1					2	207			181		10	21	212
5	45	81	83		1			1		2	211	1		180	1	9	19	210

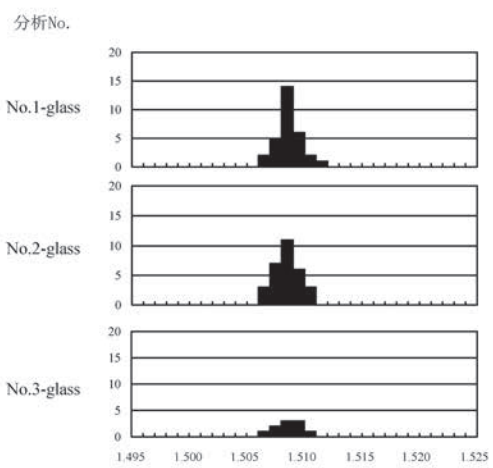
軽鉱物は、長石類や不明粒子が多く、石英（Qu）も多く、火山ガラスを僅かに含む。火山ガラスは、バブル型平板状ガラス（b1）や急冷破砕型フレーク状（c1）が僅かに含まれていた。重鉱物では、角閃石（Ho）が非常に多く、不明（Opq）や磁鉄鉱（Mag）が含まれ、斜方輝石（Opx）やジルコン（Zi）を僅かに含む（第６表、第23図）。なお、不明（Opq）には、片岩類などの岩石片が多く含まれていた（第６表、第23図）。以下に、町田・新井（2003）にまとめられている姶良Tnテフラ（AT）の特徴について記述する。

【鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）】

鬼界アカホヤテフラは、南九州鬼界カルデラから約7,300年前に噴出した降下軽石、火砕流堆積物とその降下火山灰をさす。このテフラは、輝石デイサイト質のガラス質テフラで、部層により大差なくほぼ均質である。バブル型の多い火山ガラスは、姶良Tnテフラ（AT）のそれに比べると、薄手で淡褐色を帯びるものがあり、屈折率もかなり高く、広いレンジをもつ（n=1.508-1.516）。もっとも、完全には水和していないガラスの継目などガラスの厚い部分の屈折率は低く、1.500前後のまでもある。南九州では多数の遺跡でK-Ahの上下から縄文土器が発見され（新東1978）、また中九州の熊本県や大分県でも文化層との関係が観察されつつある。それによると、K-Ahの上位と下位の火山灰土から出土する土器は、型式を異にするようである。下位から出土する土器は塞の神、吉田、前平、石坂などの諸型式の土器で、上位から出土するもののうち、最も古い土器は轟式および曾畑式である。新東（1978）は前者の

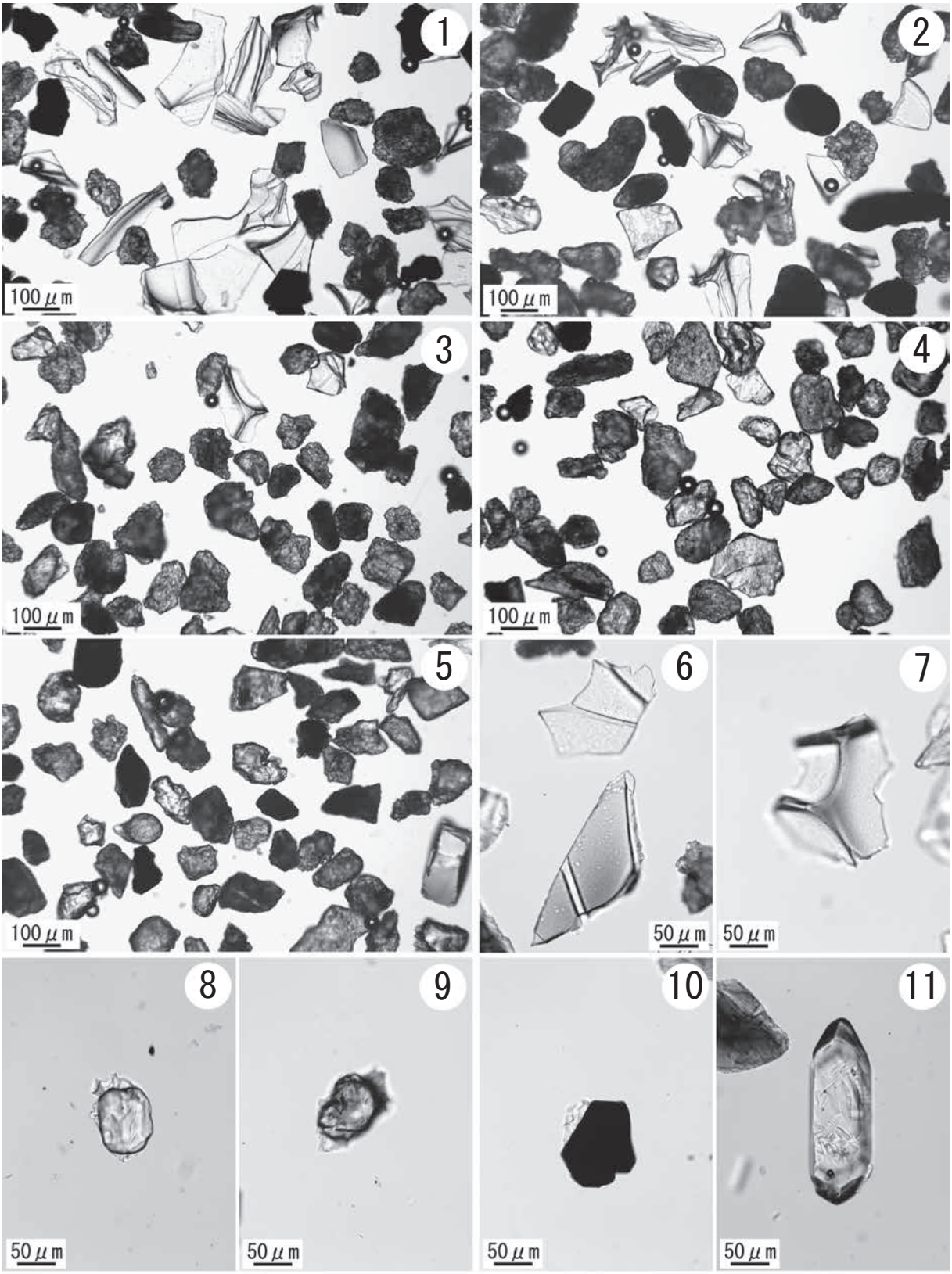


第23図　試料中の含砂率、粒度組成、鉱物組成、火山ガラスの形態



	範囲(range)	平均(mean)	計数
No.1-glass	1.5067 - 1.5113	1.5086	30
No.2-glass	1.5064 - 1.5107	1.5085	30
No.3-glass	1.5070 - 1.5109	1.5088	10

第24図　火山ガラスの屈折率測定結果



第25図　堆積物中の４φ篩残渣中の軽鉱物および火山ガラスと重鉱物

１．軽鉱物（分析 No. 1）　２．軽鉱物（分析 No. 2）　３．軽鉱物（分析 No. 3）　４．軽鉱物（分析 No. 4）
５．軽鉱物（分析 No. 5）６．バブル（泡）型平板状ガラス（No. 1）７．バブル（泡）型 Y 字状ガラス（No. 1）
８．斜方輝石（No. 1）　９．単斜輝石（No. 1）　10. 磁鉄鉱（No. 1）　11. ジルコン（No. 5）

土器群は縄文早期に入るもので、後者のそれは縄文前期に入るものとし、K-Ahを両期の境界にあると考えた。

なお、野添大辻遺跡（第２次調査）では、７層において鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）が比較的多く検出されている（株式会社古環境研究所2015）。

（４）おわりに

野添大辻遺跡（第３次調査）で採取された堆積物６層～10層の５試料について、テフラ分析を行った。

その結果、６層（分析No.１）あるいは７層（分析No.２）に火山ガラスが多く含まれ、鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）起源の火山ガラスと同定された。なお、軽鉱物に占める火山ガラスの割合は６層（分析No.１）が最も高く、６層が鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）の降灰期に近いと考えられる。

引用文献

株式会社古環境研究所2015「Ⅴ　第１次・第２次調査にかかる自然科学分析」『野添大辻遺跡（第２次）発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター

新東晃一1978「南九州の火山灰と土器形式」『どるめん』19巻、ＪＩＣＣ出版

町田　洋・新井房夫2003『新編火山灰アトラス』、東京大学出版会、pp.336

横山卓雄・檀原　徹・山下　透1986「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』25、pp.21-30

３　珪藻分析

株式会社パレオ・ラボ　藤根　久

（１）はじめに

珪藻は、10～500μｍほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉1988、安藤1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

野添大辻遺跡は、度会郡大紀町野添地内の宮川右岸の標高約65ｍの台地上に立地する縄文時代と中世の集落跡である。ここでは、野添大辻遺跡第３次調査における基本土層堆積物中の珪藻化石を調べ、堆積環境について検討した。なお、同一試料についてプラント・オパール分析とテフラ分析も行われている（各分析項目を参照）。

（２）試料と方法

試料は、野添大辻遺跡第３次調査における基本土層堆積物の５試料である（第４表）。

試料について、以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

（１）試料は、１ｇ程度をトールビーカーに移して30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。（２）反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を７回ほど繰り返した。（３）懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下600倍および1500倍で観察し、珪藻化石について同定・計数した。いずれの試料も珪藻殻数が少ないため、プレパラート全面を観察した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物１ｇ当たりの殻数を計算した。

（３）珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の淡水種については、広布種（W）として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（?）として扱った。以下に、安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

［上流性河川指標種群（J)］

河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

［中～下流性河川指標種群（K)］

河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

［最下流性河川指標種群（L)］

最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

［湖沼浮遊生指標種群（M)］

水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

［湖沼沼沢湿地指標種群（N)］

湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

［沼沢湿地付着生指標種群（O)］

水深１ｍ内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

［高層湿原指標種群（P)］

尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

［陸域指標種群（Q)］

上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている)。

［陸生珪藻Ａ群（Qa)］

耐乾性の強い特定のグループである。

［陸生珪藻Ｂ群（Qb)］

Ａ群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

（４）結果および考察

検出された珪藻化石は、淡水種が11分類群８属９種であった。これらの珪藻化石は、淡水域における２環境指標種群（Qa、Qb）に分類された（第７表)。以下では、各試料の珪藻化石群集の特徴について述べる。

［分析No.１（６層)］

検出された珪藻化石は、44個体であり、淡水種のみが検出された。堆積物１ｇ中の殻数は、1.1x10^4個、完形殻の出現率は40.9％であった。環境指標種群は、陸生珪藻Ａ群（Qa）や陸生珪藻Ｂ群（Qb）が検出された。

環境指標種群の特徴等から、ジメジメとした陸域を伴う比較的乾いた環境が推定される。

［分析No.２～５（７層～10層)］

珪藻化石は、分析No.４（９層）から陸生珪藻Ｂ群（Qb）が１個体検出されたのみであった。この結果から、珪藻化石が繁茂しない乾いた環境が推定される。

なお、野添大辻遺跡第２次調査では、５層～９層において陸域指標種群の珪藻化石が僅かに検出され、やや湿潤な陸域環境が推定されている（株式会社古環境研究所2015)。

（５）おわりに

野添大辻遺跡第３次調査における基本土層堆積物の５試料について珪藻化石を調べた。その結果、分析No.１（６層）では、ジメジメとした陸域を伴う比較的乾いた環境が推定された。分析No.２～５（７層～10層）では珪藻化石がほとんど検出されず、乾いた堆積環境が推定された。

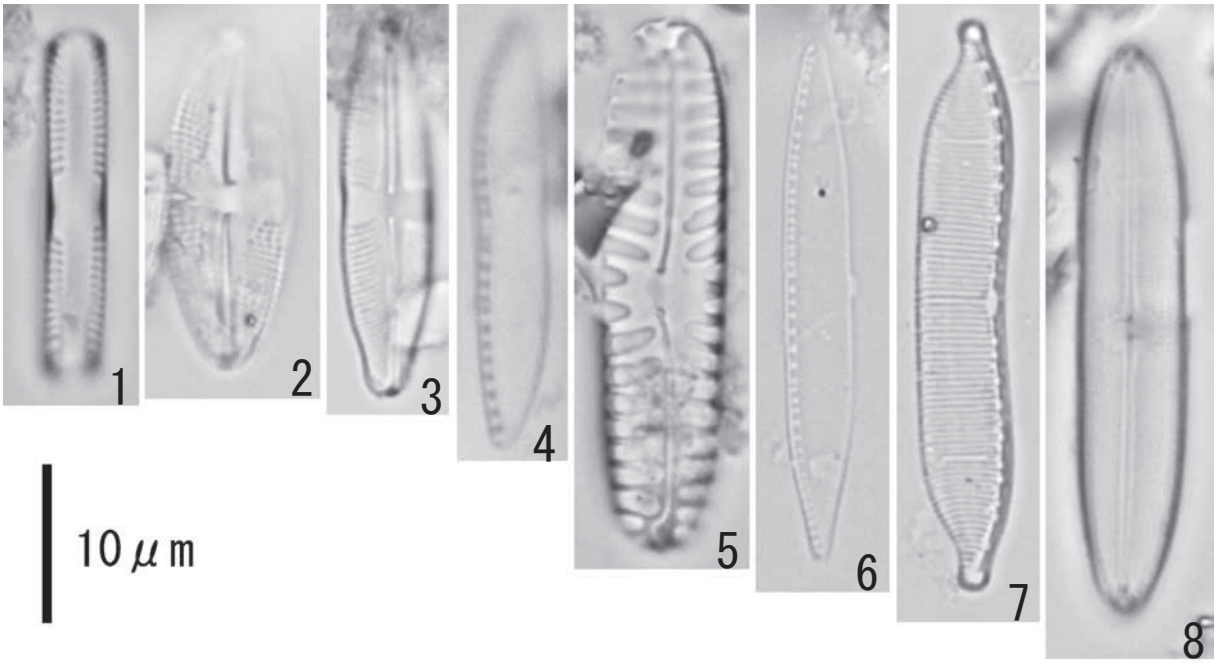
引用文献

安藤一男1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42、pp.73-88

株式会社古環境研究所2015「Ⅴ　第１次・第２次調査にかかる自然科学分析」『野添大辻遺跡（第２次）発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター

小杉正人1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27、pp.１-20

千葉　崇・澤井裕紀2014「環境指標種群の再検討と更新」『Diatom』３、pp.７-30



第26図　堆積物中の珪藻化石

1.*Pinnularia subcapitata*（No.1）2.*Navicula pseudokotschyi*（No.1）

3.*Stauroneis obtusa*（No.4）4.*Nitzschia brevissima*（No.1）5.*Pinnularia borealis*（No.1）

6.*Nitzschia perminuta*（No.1）7.*Hantzschia amphioxys*（No.1）8.*Neidium alpinum*（No.1）

第７表　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、千葉・澤井（2014）による）

No.	分類群		種群	1	2	3	4	5
1	*Cymbella*	spp.	?	1				
2	*Hantzschia*	*amphioxys*	Qa	6				
3	*Navicula*	*pseudokotschyi*	Qa	1				
4	*Neidium*	*alpinum*	Qa	1				
5	*Nitzschia*	*brevissima*	Qb	4				
6	*N.*	*perminuta*	W	9				
7	*Pinnularia*	*borealis*	Qa	16				
8	*P.*	*subcapitata*	Qb	2				
9	*Stauroneis*	*obtusa*	Qb	2			1	
10	*Surirella*	spp.	?	1				
11	*S.*	*ulna*	W	1				
1	陸生Ａ群		Qa	24				
2	陸生Ｂ群		Qb	8			1	
3	広布種		W	10				
4	淡水不定・不明種		?	2				
	合　計			44	0	0	1	0
	完形殻の出現率（%）			40.9	-	-	100.0	-
	堆積物1g中の殻数（個）			1.1E+4	-	-	5.2E+2	-

4　プラント・オパール分析

株式会社パレオ・ラボ　森　将志

（1）はじめに

三重県度会郡大紀町野添に所在する野添大辻遺跡は、宮川右岸の段丘上に位置する縄文時代と中世の集落遺跡である。この遺跡の古植生を検討するために土壌試料が採取された。以下では、試料に対して行ったプラント・オパール分析の結果を示し、イネ科植物相について検討した。

（2）試料と方法

分析試料は、１区北西壁土層断面から採取された５点である（第４表）。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04㎜）を加える。これに30％の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01㎜以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、図版に載せた。

（3）結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１g当りの各プラント・オパール個数を求め（第８表）、分布図を第27図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料１g当りの検出個数である。

検鏡の結果、ネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の６種類の機動細胞珪酸体が確認できた。10層ではササ属型機動細胞珪酸体の産出が最も多く、14,700個である。次いでネザサ節型機動細胞珪酸体が12,100個、ウシクサ族機動細胞珪酸体が4,000個、キビ族機動細胞珪酸体が1,300個となる。９層になると、ネザサ節型機動細胞珪酸体が顕著に増加し、113,000個となる。その他ではササ属型や他のタケ亜科、キビ族、ウシクサ族の機動細胞珪酸体の産出も見られた。なお、ネザサ節型機動細胞珪酸体は９層以上の層準でさらに増加しており、238,700～708,000個である。８層と７層で産出が目立つのはウシクサ族機動細胞珪酸体で、８層では117,700個、７層では106,000個である。６層ではヨシ属機動細胞珪酸体の産出が見られ、4,000個である。また、イネの籾殻に形成されるイネ穎破片の産出も見られた。

（4）考察

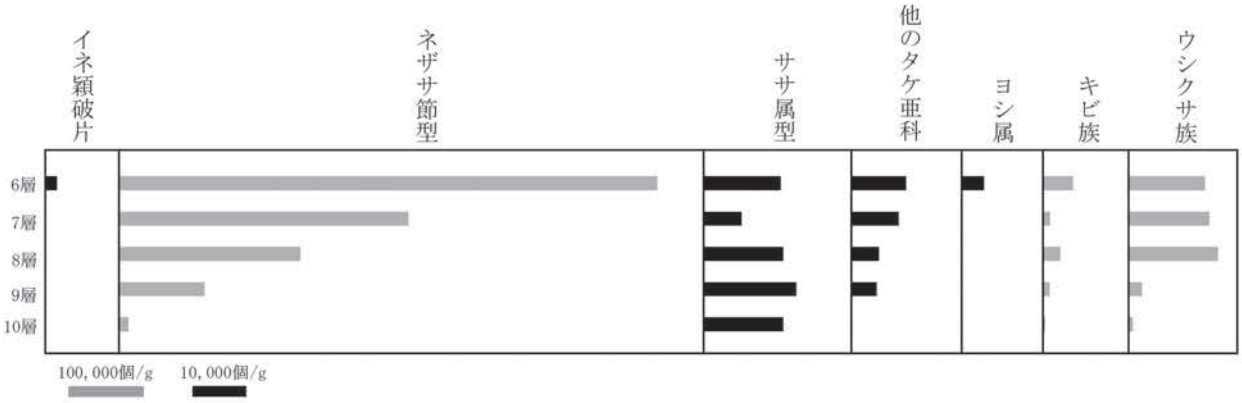
10層ではササ属型機動細胞珪酸体の産出が最も多く、次いでネザサ節型機動細胞珪酸体の産出が目立つ。よって、当時の段丘上はササ属やネザサ節のササ類が広がり、キビ族やウシクサ族を伴う植生であったと思われる。９層になるとネザサ節型機動細胞珪酸体の増加が著しい。この時期にはネザサ節のササ類が段丘周辺で分布を拡大させていたと思われる。ネザサ節型機動細胞珪酸体は９層以上の層準において増加傾向にあり、９層堆積以降、段丘上で優占的に分布を広げていたと考えられる。８層から７層の堆積時期になるとウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が増える。この時期はススキやチガヤ等のウシクサ族が段丘上に広がっており、一部に草原的な景観が存在していた可能性がある。６層ではヨシ属機動細胞珪酸体の産出が見られた。この時期は抽水植物のヨシ属が生育できる湿潤な場所が段丘上の一部に存在していた可能性がある。また、６層ではイネの籾殻に形成される植物珪酸体（イネ穎破片）の産出も確認できた。後述するように、イネ穎破片の産出についてはいくつかの可能性が考えられる。

ところで、野添大辻遺跡では２次調査において、今回の分析試料採取層準と同一の層準で自然科学分析が行われている（株式会社古環境研究所2015）。２次調査の植物珪酸体分析の結果と今回の結果を比べると、10層においてササ属が多く産出する点や、９層以上の層準でネザサ節が増加する点は一致する。異なるのは、２次調査で７層や８層においてヨシ属の産出が見られたが、今回の分析ではヨシ属の産出が確認できていない点である。これには、場所の違

いにより相違が生じた可能性が考えられる。すなわち、２次調査の分析地点と今回の分析地点はおよそ600m離れており、一方ではヨシ属が生育できるような湿潤な場所が存在したが、一方ではウシクサ族が生育するような草原的な環境が広がっていたなど、同じ段丘上でも場所によってやや異なった植生が存在していたのではなかろうか。さらに、今回の分析では６層においてイネ穎破片の産出が見られた。２次調査ではイネは確認されておらず、イネ穎破片の産出も２次調査の結果と異なる点である。６層には鬼界アカホヤ火山灰が少量混じっており、上面が中世遺構検出面であるが、この６層におけるイネの産出についてはいくつかの可能性が考えられる。例えば、鬼界アカホヤ火山灰を含む６層が堆積した後、後世の撹拌などでイネ籾殻が混じり込んだ可能性や、鬼界アカホヤ火山灰を含む６層が二次的に堆積したときにイネの籾殻も混じり込んだ可能性などである。

引用文献

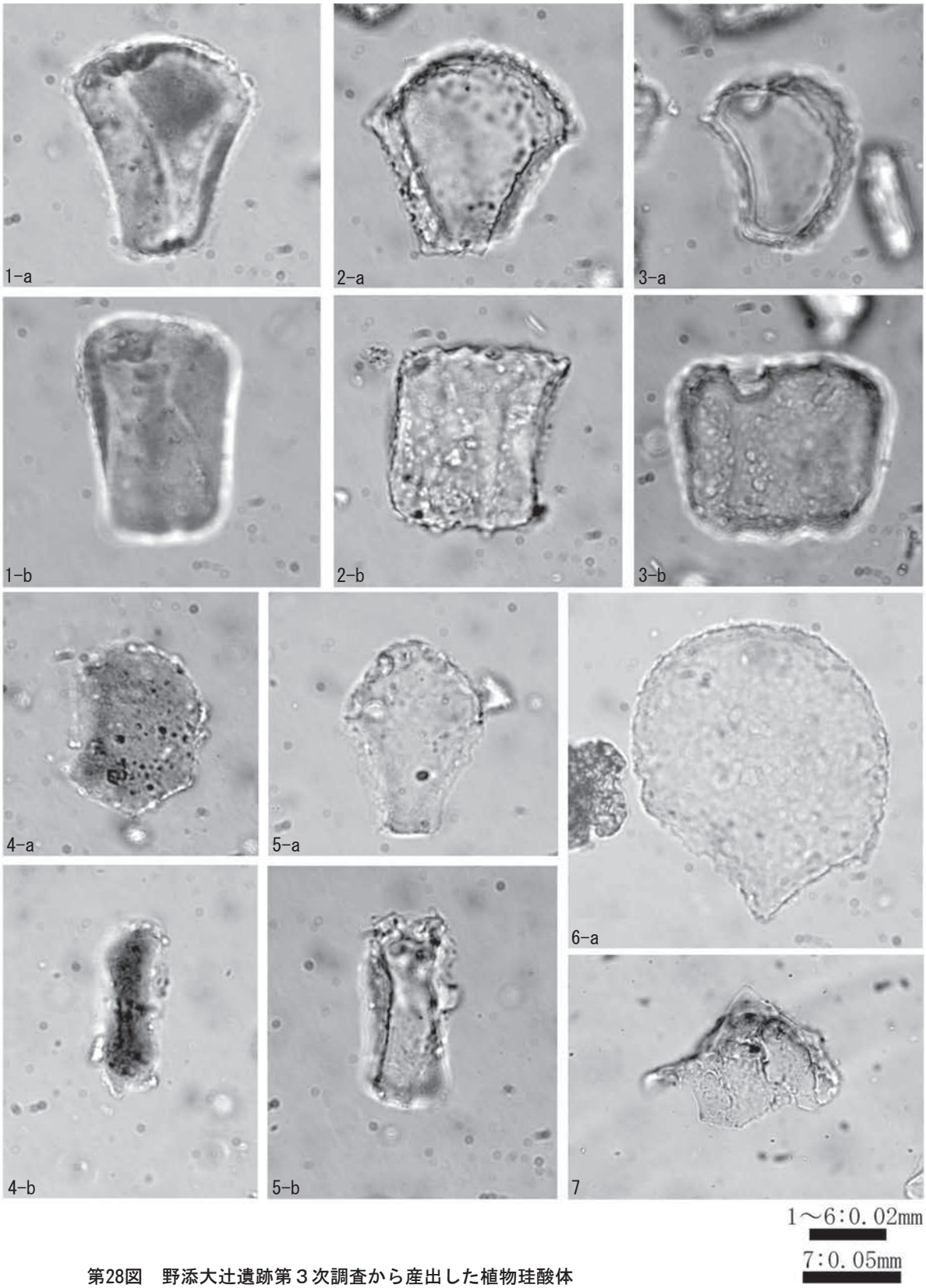
株式会社古環境研究所2015「Ⅴ　第１次・第２次調査にかかる自然科学分析」『野添大辻遺跡（第２次）発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター、pp. 32-52



第27図　野添大辻遺跡第３次調査における植物珪酸体分布図

第８表　試料１g当りのプラント・オパール個数

	イネ穎破片（個／g）	ネザサ節型（個／g）	ササ属型（個／g）	他のタケ亜科（個／g）	ヨシ属（個／g）	キビ族（個／g）	ウシクサ族（個／g）	棒状珪酸体（個／g）
６層	2,000	708,000	14,200	10,100	4,000	38,400	99,100	8,100
７層	0	380,500	6,900	8,700	0	8,700	106,000	20,800
８層	0	238,700	14,700	4,900	0	21,300	117,700	44,100
９層	0	113,000	17,000	4,600	0	7,700	17,000	0
10層	0	12,100	14,700	0	0	1,300	4,000	0



第28図　野添大辻遺跡第３次調査から産出した植物珪酸体

１.ウシクサ族機動細胞珪酸体（７層）　２.ネザサ節型機動細胞珪酸体（７層）
３.キビ族機動細胞珪酸体（７層）　４.ササ属型機動細胞珪酸体（10層）
５.他のタケ亜科機動細胞珪酸体（７層）　６.ヨシ属機動細胞珪酸体（６層）
７.イネ穎破片（６層）

Ⅵ　総　括

1　中世「野副郷」の様相

（1）屋敷地と熊野脇道（第29図）

第３次調査では掘立柱建物・柱列、井戸、土坑等が確認された。特に、掘立柱建物は調査区南側に想定される熊野脇道を意識した建物配置となっている。これらの建物の時期は15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

第２次調査においても掘立柱建物は熊野脇道を意識した配置が見られた。第２次調査１・２区では切通状の道路遺構が確認されており、熊野脇道から派生する枝道で集落内の屋敷地や田畑を区画するものと考えられる。

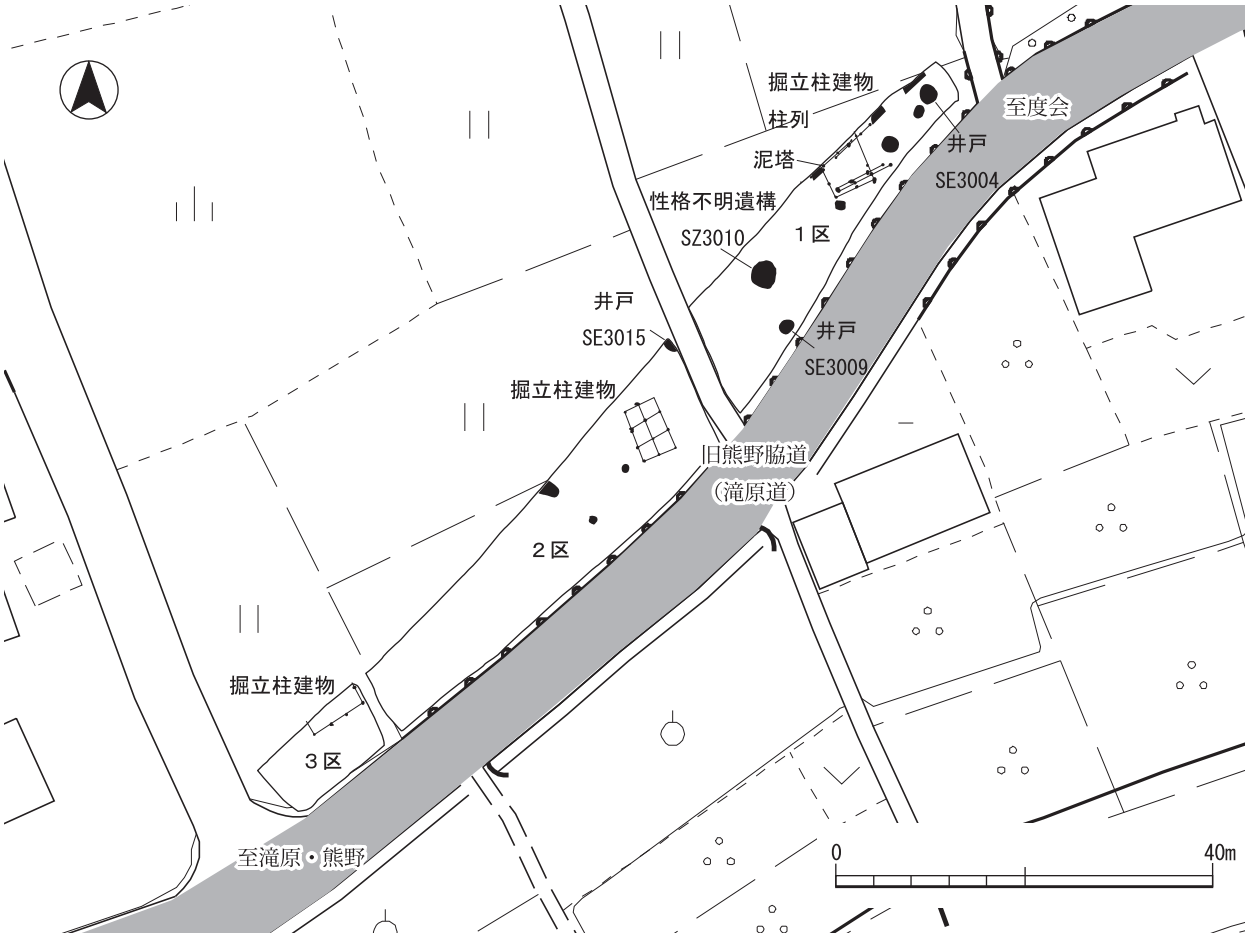
（2）屋敷地の内部構成

『第２次報告』において、井戸と掘立柱建物の位置関係から屋敷地の内部構成が捉えられている。

石組井戸ＳＥ2035が見つかった第２次調査３区では溝や熊野脇道との位置関係などから、調査区の西側に主屋が存在したと指摘される。なお、ＳＥ2035の出土遺物には瓦質風炉がある。類例に京都市山科本願寺跡のものがあり、15世紀中頃の石組井戸から出土している[1]。

第１次調査ＳＥ28、ＳＥ34は井戸の東側で遺構が希薄となる。ＳＥ95は井戸の南側に柱穴が集中し、建物が存在する可能性が高いと指摘される。

第３次調査では、１区では石組井戸ＳＥ3004（16世紀前半）の南西側に掘立柱建物・柱列があり、建物周辺に土坑とピット群が見られる。遺物はこの範囲から集中して出土おり、１区中央から西端まで遺構・遺物が希薄となる。なお、ＳＥ3009は14世紀後半で上記の遺構より先行すると考えられ、同時期の遺構・遺物は周囲に確認されなかった。



第29図　主要遺構分布図（1:800）

２区では石組井戸ＳＥ3015（16世紀前半）が調査区北東端に位置し、その南西に掘立柱建物、土坑、ピット群が見られ、遺物はこの範囲から集中して出土する。調査区中央から西端にかけて出土遺物は見られない。この間については、小穴が多く見られるが近現代の耕作等による撹乱が多くを占めているため、中世の遺構密度は希薄と考えられる。

３区では掘立柱建物が調査区北東に位置し、その周辺にピット群が見られる。建物より南西側では遺構が希薄になる。

これまでの調査成果を総合的に検討すると、野添大辻遺跡における中世Ⅳ期の屋敷地の内部構造は、建物の北東・東側に井戸を配する傾向が見られる。また、第３次調査で確認された掘立柱建物は40m程の間隔で配置されていることが指摘できる。概ね等間隔で屋敷地が区切られ、各屋敷地に建物と井戸が配置される内部構造であったと考えられる。

2　泥塔の位置づけ

（1）泥塔供養

泥塔供養は平安時代末から鎌倉時代にかけて天皇、貴族、武士などの支配階級が願主となり、怨霊調伏、病気平癒、安産等の願意を叶えるために土製の小塔を量産し供養した仏教営為である(2)。平安時代には「泥塔供養作法」にのっとり、泥塔が作られたことが『仏説造塔延命功徳経』に説かれていて、こうした作法に基づき量産される(3)。支配者層が願主となり泥塔を量産し、寺院などの宗教施設へ一括して納めることで供養を行ったと考えられる。この時期の泥塔は１箇所で多数まとまり発見される特徴がある。

室町時代以降になると、全国的に少数で発見される事例が増加することから、この時期の泥塔は量産された後に流通し始めると想定される。さらに、遺

第９表　偏平舟形光背宝塔型泥塔一覧

№.	所在地	発見場所	発見状況	分類	遺構の時期	長さ（cm）	底部幅（cm）	最大厚（cm）	底部孔形態	底部孔幅（cm）	底部孔深（cm）	宝塔軸部の梵字・仏	出典等
1	三重県伊勢市	松原泥塔出土遺跡	不明	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		10.4	5.6	2.5	—	—	—	梵字(キリーク)	註４・14
2	三重県伊賀市	将軍塚１号	塚状遺構(石に囲まれ安置)	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型	15世紀後半～16世紀前半	9.5	4.9	1.7	無			梵字(キリーク)	註７
3	三重県伊賀市	常福寺	伝世品	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		9.5	4.6	1.7	—	—	—	梵字(キリーク)	註４
4	三重県名張市	貴福寺	伝世品	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		9.6	4.7	1.6	—	—	—	梵字(キリーク)	註４
5	三重県名張市	丈六寺	伝世品	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		—	—	—	—	—	—	不明	註４
6	奈良県奈良市	平城京左京四条六坊十四坪・奈良町遺跡第424次	井戸SE16出土	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型	17世紀前半	(4.8)	(4.2)	(1.8)	—	—	—	不明	註８
7	奈良県桜井市	山田寺	溝SD223出土	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型	13～15世紀	(5.2)	—	(1.8)	—	—	—	不明	註10
8	奈良県桜井市	文殊山	不明	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		—	—	—	—	—	—	不明	註４
9	奈良県高市郡高取町	東明神古墳	盗掘坑出土	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型	15世紀	9.7	4.5	1.6	無			梵字(キリーク)	註９
10		東明神古墳	盗掘坑出土	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型	15世紀	9.9	4.9	1.6	無			梵字(キリーク)	
11	奈良県吉野郡吉野町	金峯山寺	不明	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		—	—	—	—	—	—	梵字(キリーク)	吉野町立吉野歴史資料館展示
12	鳥取県東伯郡琴浦町	船上山麓	不明	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		10.4	5.1	1.9	無			梵字(キリーク)	註２
13	愛知県清須市	清州城下町遺跡	溝SD4039出土	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型	15世紀後半～16世紀初頭	(6.8)	3.4	2.1	有　不明	—	—	梵字(ウン、タラーク) 阿閦如来 虚空蔵菩薩	註11
14	愛知県愛西市	木曽川左岸	表採	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型		(5.6)	(3.2)	1.9	有　円形	0.4	0.2	多宝如来坐像	註15
15	三重県亀山市	正法寺山荘跡	遺物包含層出土	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型	15世紀後半～16世紀前半か	7.6	3.4	1.6	無			多宝如来坐像	註12・15
16	三重県松阪市	宝蔵寺跡	不明	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型		(8.3)	4.4	(2.5)	有　楕円形	0.4×0.2	—	梵字	註16
17	三重県伊勢市	等観寺	伝世品	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型		8	3.4	2	有　円形	0.4	0.5以上	多宝如来坐像	註15・17
18	三重県度会郡大紀町	野添大辻遺跡	柱穴出土	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型	16世紀前半	8.7	3.5	2	有　楕円形	0.4×0.3	2.3	梵字(ア) 多宝如来坐像	本報告
19	京都府相楽郡笠置町	笠置寺経塚	表採	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型		—	—	—	有　円形	—	—	多宝如来坐像	註15、京都府立山城郷土資料館展示

※「長さ」「底部幅」「最大厚」の（　）内の数値は残存長を示す。　「—」は不明を示す。

跡の出土事例では寺院等の宗教施設以外にも集落跡で発見される。泥塔供養が支配階級のみならず民衆へと広まり、少数の泥塔で供養を行う信仰形態へと変化したことが指摘される[4]。

（２）泥塔の分類（第30図）

野添大辻遺跡出土泥塔の分析にあたり、各地の泥塔を分類し、その分布状況から考察する。泥塔の分類は畑氏により総合的な分析がなされており、大きくはこの分類に従うが一部名称に修正を加えた。泥塔は立体形と偏平形の２つに分けられる[5]。

立体泥塔　方形、円形のもので立体的に塔を表現したもの。

偏平泥塔　板状で片面あるいは両面に塔を平面的に表現するもの。塔の形や種子が凹凸をもって表現するものも含む。

野添大辻遺跡の泥塔は偏平泥塔に分類される。また、三重県内における中世後期以降の泥塔は偏平泥塔であるため、こちらの詳細な分析を進める。偏平泥塔は大きく３つに分類される。

A　偏平板五輪塔形　輪郭で五輪塔形を表現し、両面あるいは片面の各輪に五大種が１字ずつ押されるもの。さらに、構図により２つに細別される。

A1　偏平板五輪塔Ⅰ型　梵字あるいは梵字と字だけもの。全長6.5cm前後がⅠa型、８～10cmがⅠb型となる。

A2　偏平板五輪塔Ⅱ型　梵字あるいは梵字と字、蓮弁模様装飾が施されるもの。

B　偏平板宝塔形　輪郭で宝塔を表現し、両面あるいは片面に梵字、字が押されているもの。

C　偏平舟形光背宝塔形　舟形光背形の土版に宝塔形が表現され、塔身に梵字を陽刻したもの。

野添大辻遺跡の泥塔は偏平舟形光背宝塔形に該当する。畑氏の分類では偏平舟形光背宝塔形の細別はなされていないが、細別により地域的な傾向が指摘できるため、筆者が以下の通り分類を行った。

C1　偏平舟形光背宝塔Ⅰ型　舟形光背形の土版で縦断面形が偏平なもの。正面には浅い凹凸で宝塔が表現され、宝塔の軸に梵字が見られるもの。

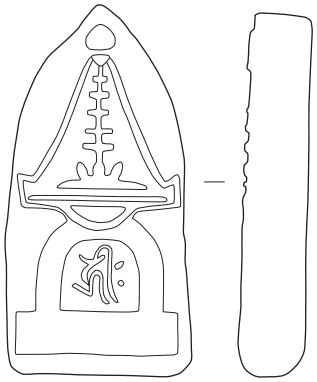
C2　偏平舟形光背宝塔Ⅱ型　舟形光背形の土版で縦断面形は正面が立体で、背面と側面、底部が偏平なもの。正面には立体的に宝塔が表現され、宝塔の軸に梵字や仏が見られるもの。野添大辻遺跡の泥塔は偏平舟形光背宝塔Ⅱ型にあたる。

（３）偏平泥塔の分布（第９表）

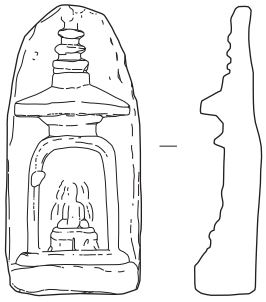
偏平泥塔の内、偏平舟形光背宝塔Ⅰ型は12例、偏平舟形光背宝塔Ⅱ型は７例確認できる。偏平舟形光背宝塔Ⅰ型は奈良県と三重県の伊賀盆地で多くの分布が見られる。他地域への広がりは鳥取県船上山麓で１点のみであることから、奈良から伊賀地域の比較的狭い地域が流通の分布であったと言えよう。

偏平舟形光背宝塔Ⅱ型は三重県の伊勢地域を中心に分布し、愛知県尾張地域や京都府山城地域にも広がりを見せる。偏平舟形光背宝塔Ⅰ型と同様に狭い地域が流通範囲と考えられ、この他の地域では同型の泥塔は確認できていない。

偏平泥塔の分布は、偏平板五輪塔形は福島県から島根県・高知県と広い範囲で見られ、偏平板宝塔形は兵庫県が中心となる[6]。さらに、発見基数では偏平板五輪塔Ⅰa・Ⅱ型、偏平板宝塔形は１箇所から多数まとまり発見される例が多く、偏平板五輪塔Ⅰb型は少数で発見される特徴があると指摘される。



偏平舟形光背宝塔Ⅰ型泥塔（将軍塚1号　森川他 1982 改変）



偏平舟形光背宝塔Ⅱ型泥塔（正法寺山荘跡　伊藤 1993 再トレース）

0　5cm

第30図　偏平舟形光背宝塔型泥塔分類図（1:2）

（４）出土事例の検討

野添大辻遺跡の泥塔は掘立柱建物の柱穴から正立状態で出土した。柱の抜き取り後に柱穴へ安置されたものと考えられる。偏平舟形光背宝塔型泥塔の出土状況をまとめ、時期や出土遺構の性格を検討する。

将軍塚１号（三重県伊賀市）　塚状遺構より偏平舟形光背宝塔Ⅰ型泥塔が出土。塚状遺構の中心部において表土下30～40㎝の層で石に囲まれて安置された状態が確認された。中心部の表土下25㎝程で陶器類、50～60㎝程で土師器皿が出土しており、15世紀後半～16世紀前半のものと考えられる[7]。

平城京左京四条六坊十四坪・奈良町遺跡（奈良県奈良市）　調査では奈良～江戸時代までの遺構・遺物が確認された。井戸ＳＥ16から偏平舟形光背宝塔Ⅰ型泥塔と17世紀前半の土師器、瓦質土器、陶器等が出土している。泥塔の上部が残存し相輪、宝鎖が確認できる[8]。

東明神古墳（奈良県高取町）　中世の盗掘坑の入口付近で偏平舟形光背宝塔Ⅰ型泥塔２基が置かれた状態で出土。盗掘坑の堆積土からは15世紀のものと考えられる小型瓦器椀が出土しており、同時期のものと指摘される。泥塔は盗掘後に供養のために置かれたものと見られる[9]。

なお、２基の泥塔は正面に宝塔と梵字（キリーク）がある構図となるが、宝塔の形態に若干違いが見られる。別型で作成されたものと考えられる。

山田寺（奈良県桜井市）　13世紀～15世紀の土器を含む溝ＳＤ223から偏平舟形光背宝塔Ⅰ型泥塔が出土。泥塔は上半分が残存しており宝珠、相輪、宝鎖、露盤、笠が確認できる[10]。

清州城下町遺跡（愛知県清須市）　旧五条川に並行して設けられた溝ＳＤ4039から単体で偏平舟形光背宝塔Ⅱ型が出土。ＳＤ4039は旧五条川の河川空間と生活域の境界溝とされ、遺構変遷の状況から城下町Ⅰ期（15世紀後半～16世紀初頭）と位置づけられる。

旧五条川の時期は15世紀後葉から16世紀前半と見られる。出土遺物には柿経や妙法蓮華経、金剛般若経を書写した卒塔婆、無数の刀傷のある頭骨等があり宗教的な場であった事が推定される[11]。

泥塔には宝塔、梵字、仏が立体的に表現されており、野添大辻遺跡の泥塔と類似する。しかし、宝塔の軸内には二仏（阿閦如来、虚空蔵菩薩）とそれぞれの頭上には梵字があり、構図に差異が見られる。

正法寺山荘跡（三重県亀山市）　第８次調査の包含層より偏平舟形光背宝塔Ⅱ型が出土。山荘跡存続期（15世紀後半～16世紀前半）と山荘跡以前（13世紀）の２期の遺構が確認された[12]。他の遺跡における偏平泥塔の時期を踏まえると、前者の時期にあたると考えられる。泥塔には宝塔、仏像が確認でき、梵字の有無は不明瞭であるが、野添大辻遺跡と同型のものである。

笠置寺経塚（京都府山城町）　笠置寺経塚は奈良時代からの弥勒信仰の霊場で、平安時代後期の土製経筒や銅製経筒、松鶴鏡、青白磁合子等の一括遺物がある[13]。偏平舟形光背宝塔Ⅱ型が表採されているが、時期は不明である。泥塔には宝塔、仏像が確認でき、梵字の有無は不明瞭であるが、野添大辻遺跡と同型のものである。

以上の出土事例の検討から、偏平舟形光背宝塔Ⅰ型は15～16世紀が初現で17世紀まで継続し、偏平舟形光背宝塔Ⅱ型は15～16世紀のものと考えられる。出土状況を整理すると寺院、経塚、塚状遺構といった信仰に関する場、城下町や門前町、集落といった生活に関する場に分類できる。後者でも野添大辻遺跡や清須城下町遺跡は生活域における祭祀に関わるものであろう。

偏平板五輪塔Ⅰb型についても上記のような２つの出土パターンが指摘されており、中世後期における泥塔利用の特徴と位置づけることができる。

泥塔は中世前期において支配階級による供養に限定されていたが、中世後期には寺院等の宗教施設（それに関連する施設）で生産された後に地域へ流通し、各地で地鎮や祭祀等に利用されたと考えられる。より下位の民衆レベルまで広がる中で、信仰の中心がこうした人々へと変化したと見られる。出土事例が限定されることからも、比較的上位の階層や富裕層が用いたものであっただろう。

（５）まとめ

野添大辻遺跡は熊野脇道沿いの一般的な塊村であるが、出土遺物には瓦質風炉や泥塔といった重要遺物が見られる。風炉は京や堺といった都市部、地方

では城館や寺院、湊などの集散地で出土が多く、一般集落には見られないという。こうした出土遺物の特性から付近に有力者の居館が存在したことや上位の階層・富裕層にあたる人物の存在が考えられる。

また、こうした重要遺物の流通の背景として、多気と奥伊勢・熊野の結節点となる集落であったことや、伊勢地域に所在する全国屈指の経済都市である山田の影響が想定される。都市部からの経済的・文化的影響が野添大辻遺跡のような街道沿い集落へも波及していたのであろう。

3　結語

野添大辻遺跡の発掘調査によって、宮川中流域の段丘上に展開する縄文時代早期の集落、中世における熊野脇道沿いの集落の姿が明らかとなった。今後、工事に伴う立会調査も随時継続するが、本報告において一区切りとなる。

本報告では偏平舟形光背宝塔型泥塔のみの検討に留まったが、偏平泥塔の出現時期と分布、出土状況を近年の出土事例を踏まえて考察を行うことが課題である。個別の分析では、泥塔は型作りという特徴から同型品の検討が可能と考える。遺跡や地域間での同型品の特定により、生産と流通の実態がより詳細に現れ、地域社会の姿が浮き彫りとなることであろう。また、瓦質風炉や泥塔といった重要遺物について全国的な比較、検討を進めることで本地域と熊野脇道を行きかう人々の姿がより鮮明なものになるであろう。

註

（1）財団法人京都市埋蔵文化財研究所「Ⅴ　山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』、京都市文化市民局、2015年

（2）畑　大介「泥塔の用途をめぐる一、二の視点について」『山梨考古学論集』Ⅰ、山梨考古学協会野沢昌康先生頌寿記念論文編集委員会、1986年

（3）伊藤久嗣「続「泥塔」小考」『斎宮歴史博物館研究紀要』五、斎宮歴史博物館、1996年

石村喜英「瓦塔と泥塔」『新版考古学講座』第８巻特論〈上〉、雄山閣出版株式会社、1971年

木下密運「小塔」『仏教考古学講座』第３巻　塔・塔婆、雄山閣出版株式会社、1976年

久保常晴「仏教」『新版考古学講座』第８巻特論〈上〉、雄山閣出版株式会社、1971年

（4）畑　大介「偏平形泥塔について」『山梨県考古学論文集』Ⅱ、山梨県考古学協会10周年記念論文集編集委員会、1989年

畑　大介「偏平形土製五輪塔の性格をめぐって」『甲斐中世史と仏教美術』、植松又次先生頌寿記念論文集刊行会、1994年

（5）註４前掲

（6）註４前掲

（7）森川桜男　北出楯夫　山田　猛「伊賀の将軍塚」『伊賀郷土史研究』８、伊賀郷土史研究会、1982年

（8）奈良市教育委員会「３．平城京左京四条六坪十四坪・奈良町遺跡の調査　第424次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成11年度、2001年

（9）河上邦彦編『束明神古墳の研究』橿原考古学研究所研究成果 第２冊、奈良県立橿原考古学研究所、1999年

（10）独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報第63冊、2002年

（11）財団法人愛知県埋蔵文化財センター『清須城下町遺跡』Ⅳ、1994年

（12）関町教育委員会『史跡正法寺山荘跡発掘調査報告　昭和59年度』関町埋蔵文化財調査報告Ⅷ、1985年

（13）京都府立山城郷土資料館『南山城の歴史と文化』展示図録24、2002年

（14）岡田　登「242　松原泥塔出土遺跡」『伊勢市史』第６巻考古編、伊勢市、2011年

（15）伊藤久嗣「「泥塔」小考」『斎宮歴史博物館研究紀要』二、斎宮歴史博物館、1993年

（16）松阪市史編さん委員会「５　松阪市出土の泥塔」『松阪市史』第３巻史料編 古代・中世、1980年

（17）伊勢市立郷土資料館『伊勢の経塚』特別展図録 第５冊、1991年

津田守一「三重県伊勢市出土の泥塔について」『古代文化』第56巻第８号、財団法人古代学協会、2004年

写　真　図　版

宮川北岸からの遺跡遠望（北から）

作業風景（北東から）

１・２区調査前状況（北東から）

２・３区調査前状況（南西から）

１区全景（南西から）

２区全景（北東から）

３区全景（南西から）

１区掘立柱建物・柱列完掘状況（北東から）

１区掘立柱建物・柱列完掘状況（南東から）

２区掘立柱建物完掘状況（南東から）

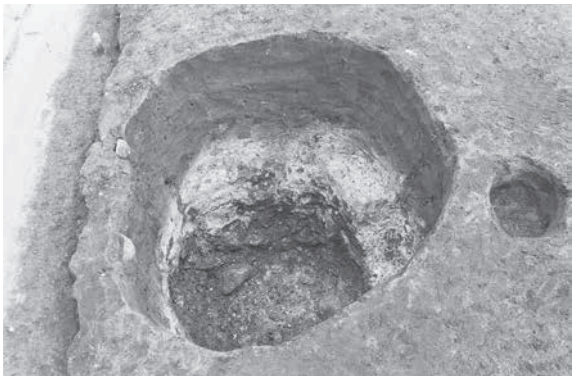
ＳＺ3010検出状況（南から）

ＳＥ3004検出状況（北西から）

ＳＥ3004半裁状況（南から）

ＳＥ3004石組半裁状況（南から）

Ｑ３ Pit１出土状況（北から）



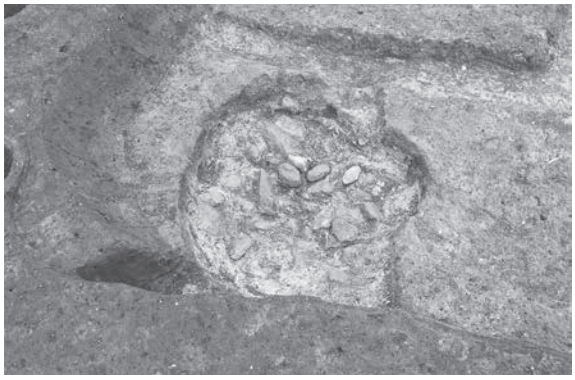
ＳＥ3009掘削状況（北から）

ＳＥ3015掘削状況（南から）

ＳＫ3018完掘状況（北西から）

ＳＫ3020上部石材出土状況（北から）

ＳＫ3020下部石材出土状況（北から）



ＳＫ3020底部石材出土状況（北から）

ＳＺ3010完掘状況（北から）

遺物4・10・13・17・18・20・21・24

25

27

28

29

33

37

43

44

48

54

遺物25・27・28・29・33・37・43・44・48・54

59

60

61

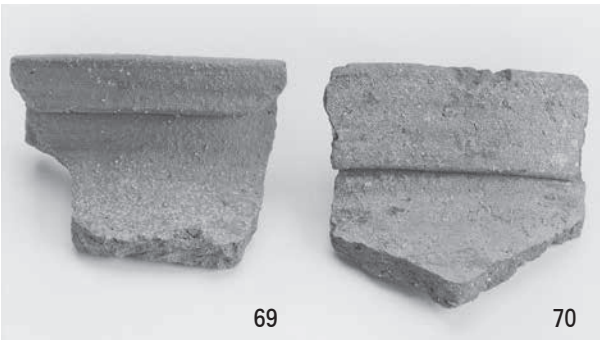
64

65

66

67

68


69 70

78

遺物59・60・61・64～70・78

報　告　書　抄　録

ふりがな	のぞえおおつじいせき(だい３じ)はっくつちょうさほうこく
書　　名	野添大辻遺跡(第３次)発掘調査報告
副書名	
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	３６６
編著者名	小原雄也
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596（52）1732
発行年月日	2016(平成28)年３月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のぞえおおつじいせき 野添大辻遺跡	わたらいぐんたいきちょうのぞえ 度会郡大紀町野添	24471	a 45	34度 24分 57秒	136度 29分 6秒	20140509 ～ 20150116	本調査 784㎡ 工事立会 62㎡	主要地方道伊勢大宮線（野添）地方道路整備(改築)事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野添大辻遺跡	集落跡	中世 近世	掘立柱建物 井戸 土坑	土師器 陶器 泥塔	

要約

当遺跡は宮川右岸段丘上に立地し、遺跡の中央を中～近世の熊野脇道（滝原道）が通過している。道路拡幅工事に伴い発掘調査を実施し、室町時代（戦国期）の掘立柱建物３棟、柱列４条、井戸３基などの遺構を確認した。出土品にはこの時期の土師器（皿・鍋）、陶器（壺・天目茶椀）、泥塔などがある。

泥塔は掘立柱建物の柱穴内で正立した状態で出土した。本遺跡出土のものは偏平舟形光背宝塔型泥塔に分類される。泥塔正面には宝塔が立体的に表現され、宝塔の軸には梵字、多宝如来坐像が見られる。泥塔の形態は地域によって異なるが、本遺跡より出土したものの類例は三重県を中心とし、愛知県西部から京都府南部にかけて分布することが判明した。

三重県埋蔵文化財調査報告３６６

野添大辻遺跡（第３次）発掘調査報告

2016（平成28）年３月18日
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　光出版印刷株式会社